



東京上野本店 (The シカゴビル)

OPEN: 12:00~19:30 年中無休 (年末年始を除く)

〒110-0005 東京都台東区上野1-12-7

TEL.03-5818-1123 FAX.03-5818-1124

E-mail : chicago@regimentals.jp

シカゴブログ連載中!! <http://regimentals.jugem.jp>

モバイルブログは右のQRコードからアクセスして下さい。

東京上野本店一階に古式銃専門店 The Chicago *Gallery* もございます。



大阪店 (瓦町一丁目ビル 4階)

OPEN: 12:00~20:00 年中無休 (年末年始を除く)

〒541-0048 大阪市中央区瓦町1-5-14

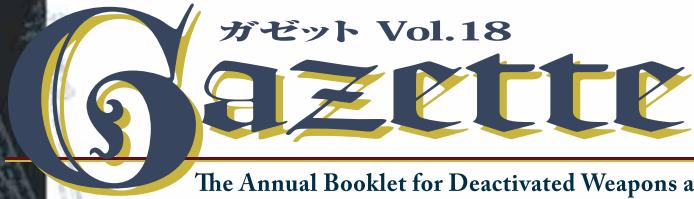
TEL.06-6223-9070 FAX.06-6223-9071

www.regimentals.jp

弊社発行物及び弊社ウェブサイトに記載の商品画像の著作権は、商品販売後も弊社が保有します。私的かつ非商業目的で使用する場合、その他著作権法により認められる場合を除き、事前に弊社が許可を受けずに、複製、公衆送信、改変、切除、お客様のウェブサイトへの転載等の行為は著作権法により禁止されています。

Copyright © Chicago Regimentals Co., Ltd. All Rights Reserved.

定価 300円(税込)



The Annual Booklet for Deactivated Weapons and Antique Firearms Collectors

Gazette Vol. 18
Deactivated Weapons & Antique Firearms, Armes neutralisées



Colt M1874 Gatling Gun
on Field Carriage

1/2 Scale Model made by Furr Arms

Chicago *Regimentals* Co., Ltd.

株式会社 シカゴレジメンタルス

Table of Contents - 目次

Type 38 Infantry Rifle, Late Production.....	Page 03
Type 38 Carbine, Late Production	Page 04
Type 97 Sniper Rifle.....	Page 05
Type 99 Short Rifle, Last Ditch	Page 06
Harpers Ferry Hall M1819 Infantry Rifle	Page 07
Colt M1855 Revolving Rifle, Full Stock Sporting Model	Page 08
Merrill M1863 Carbine, 2nd Model.....	Page 09
Winchester M1866 Yellow Boy Musket	Page 10
Springfield M1866 Trapdoor Rifle	Page 11
Springfield M1871 Ward-Burton Infantry Rifle.....	Page 12
Winchester-Lee M1895 Infantry Rifle	Page 13
Marlin M1893 Safety Rifle	Page 14
M1 Garand Rifle.....	Page 15
M1C Garand Sniper Rifle.....	Page 16
M1941 Johnson Rifle.....	Page 17
M1 Carbine.....	Page 18
M16A1 Assault Rifle.....	Page 19
M16A2 Assault Rifle.....	Page 20
LMT LM308MWS Self-loading Rifle.....	Page 21
MAC-11 Sub Machinegun.....	Page 22
Winchester M1897 Takedown Shotgun	Page 23
Winchester M1912 Shotgun.....	Page 24
Gew.91 Short Rifle	Page 25
MG08/15 Light Machinegun	Page 26
Gew.24(t) Short Rifle	Page 27
Gew.98/40 Short Rifle	Page 28
Mauser Gew.41 (M) Self-loading Rifle	Page 29
Walther Gew.41 (W) Self-loading Rifle	Page 30
Heckler & Koch G36KV Assault Rifle	Page 31
Heckler & Koch HK416 Assault Rifle	Page 32
Enfield P1842 Sea Service Percussion Musket	Page 33
Westley Richards Breech-loading Carbine.....	Page 34
Martini-Henry Mk II Rifle .22LR Conversion	Page 35
Short, Magazine Lee-Enfield Rifle No.1 Mk III	Page 36
Rifle No.4 Mk I* "US PROPERTY"	Page 37
L85A1 (SA80) Bullpup Assault Rifle	Page 38
STEN Mk V Machine Carbine.....	Page 39
Single Shot 8 Gauge Shotgun.....	Page 40
Vetterli M1870/87/15 Infantry Rifle	Page 41
Carcano M1938 Short Rifle	Page 42
Beretta BM59 Mark Ital TA Self-loading Rifle	Page 43
Benelli SPAS 15 Shotgun.....	Page 44
Sharps M1874 Sporting Rifle by Davide Pedersoli	Page 45
Sharps M1874 Carbine by Davide Pedersoli	Page 46
Berthier Mle 1892 Carbine	Page 47
FA-MAS .223 Bullpup Self-loading Rifle	Page 48
Steyr AUG A2 Heavy Barreled Automatic Rifle	Page 49
Steyr MPi 69 Sub Machinegun	Page 50
Swiss M1864 Field Shooter Rifle.....	Page 51
Swiss Prototype Percussion In-line Rifle.....	Page 52
Swiss M1817/42/59/67 Infantry Rifle.....	Page 53
Vetterli M1870 Police Carbine	Page 54

Schmidt-Rubin IG11 Infantry Rifle	Page 55
SIG SG542 Paratrooper Self-loading Rifle	Page 56
B&T APC556 PDW Assault Carbine	Page 57
Lmg 25 Light Machinegun	Page 58
FN Mauser M1930 Short Rifle	Page 59
FN MAG General Purpose Machinegun	Page 60
Beaumont-Vitali M1871/88 Infantry Rifle	Page 61
ArmaLite AR-10 Self-loading Rifle, Sudanese Model	Page 62
CETME C Self-loading Rifle	Page 63
CETME L Assault Rifle	Page 64
Danish Snider M1848/65 Infantry Rifle	Page 65
Krag-Jørgensen M1889/24 Artillery Rifle	Page 66
Mauser CG80 Match-Target Rifle	Page 67
Ljungman Ag m/42B Self-loading Rifle	Page 68
Mosin Nagant M1938 Carbine	Page 69
Tokarev SVT 1940 Self-loading Rifle	Page 70
AKM Assault Rifle	Page 71
PPSh-41 Sub Machinegun, Late Production	Page 72
DP Light Machinegun	Page 73
SGM Heavy Machinegun	Page 74
Vz.26 Sub Machinegun	Page 75
Škorpion Vz.61 Sub Machinegun	Page 76
Kbk-g wz.60 Assault Rifle	Page 77
AKMS Assault Rifle, Sectionalized Model	Page 78
AMP-69 Assault Rifle	Page 79
31M Light Machinegun	Page 80
Zastava M77B1 Self-loading Rifle	Page 81
Zastava M92 Assault Carbine	Page 82
Zastava M21 Assault Rifle, Short Barrel	Page 83
M49/57 Sub Machinegun	Page 84
IWI X95 Bullpup Assault Carbine	Page 85
UZI Sub Machinegun	Page 86
Type 43 Sub Machinegun	Page 87
Type 69-I Rocket Launcher	Page 88
Lefaucheux Paris 20 shot D/A Pinfire Revolver	Page 89
Lefaucheux Type Pinfire Revolver by C. R. Kirschbaum	Page 90
Colt M1855 Revolving Rifle .52 Caliber Model	Page 91
Sharps M1865 Carbine	Page 92
Remington New Model Army Revolver	Page 93
Colt M1862 Police Revolver	Page 94
British Coast Guard P1839 Sea Service Pistol	Page 95
Danish M1848 Percussion Cavalry Pistol	Page 96
Japanese Matchlock Long Cavalry Pistol, KUNITOMO Style	Page 97
Japanese Large-caliber Matchlock Gun	Page 98
Japanese Matchlock Musket, SATSUMA Style	Page 99
Japanese Matchlock Musket, SAKAI Style	Page 100
Japanese Matchlock Musket	Page 101
Japanese Matchlock Musket, KISHU Style	Page 102
Colt M1874 Gatling Gun on Field Carriage, 1/2 Scale	Page 103
Gazette Bookmark	Page 104
買取り/下取りのご案内 -ご来店/通信販売をご利用のお客様へ	Page 105-106
古式銃の買取り、下取りについての流れ	Page 107
無可動実銃/古式銃砲について	Page 108

Type 38 Infantry Rifle Late Production

Type 38 Infantry Rifle
Late Production
三八式歩兵銃
後期型(名古屋製)



全長 1,276mm
口径 6.5mm×50
装弾数 5発



三八式歩兵銃は1905年(明治38年)に仮制式制定となった日本陸軍の小銃です。主任設計は南部麒次郎大尉(当時)が担当し、三十年式歩兵銃に基に機関部構造の簡略化や遊底覆の追加等の改良が行われています。三八式歩兵銃は、第一次世界大戦で初めて実戦に投入されて以来日本軍の主力小銃となり、後継の九九式小銃(短小銃)と共に終戦時まで使用されました。また、戦前にはイギリス、フィンランド、メキシコ等、數ヵ国に輸出されました。三八式歩兵銃は1942年まで国内工廠にて生産された他、その後も奉天工廠(南満洲軍造兵廠)で1944年まで生産が続けられ、国產銃としては最多の約340万挺が生産されました。三八式歩兵銃の後期型は主に戦中に製造され、照尺がピープ型に変更された他、照星にガードが付き、床尾板がカップ型となっているのが特徴です。名古屋工廠はより生産数の多い小倉工廠よりも早い段階から三八式歩兵銃の生産を行っていました。



Type 38 Carbine Late Production

Type 38 Carbine
Late Production
三八式騎兵銃
後期型(名古屋製)



全長 966mm
口径 6.5mm×50
装弾数 5発



三八式歩兵銃の全長を騎兵用に短縮したモデルで、騎兵以外にも砲兵や輜重兵、車両部隊、空挺部隊といった特殊用途で使用されました。三八式騎兵銃は三八式歩兵銃と比較して銃身が短縮されている他、負革止(スリング・スペル)が本体左側面に移され、照星(フロント・サイト)には三八式歩兵銃初期型にはないガードが装備していました。照尺(リア・サイト)は100m間隔で400mから2,000mまで対応した起倒式のリーフ・タイプとなっています。三八式歩兵銃及び騎兵銃の製造は、1929年までは小石川の東京砲兵工廠(陸軍造兵廠東京工廠)のみで行われていましたが、その後名古屋工廠及び小倉工廠でも製造が行われました。三八式騎兵銃は、歩兵銃と同じく半世紀以上にわたって生産された為、時代により大きく分けて三種類のバリエーションが存在します。前期型及び中期型ではブレート型の床尾板が取り付けられていましたが、後期型ではカップ型の床尾板になりました。 本品は床尾板がカップ型となった後期型です。



Type 97 Sniper Rifle



Type 99 Short Rifle, Last Ditch



三八式歩兵銃を基に開発された狙撃銃で、三八式歩兵銃の生産途中において銃身や機関部等の精度が高い個体を選び出して2.5倍用の狙撃眼鏡台座を取り付け、造兵廠にてゼロイン調整を行った後出荷されました。尚、装着される狙撃眼鏡の生産には東京第一陸軍工廠の他、多くの民間企業が参加しました。楋桿は操作時に狙撃眼鏡に干渉しないよう延長されて下方に折り曲げられています。狙撃銃は一般的歩兵中隊内の選抜射手によって使用され、九七式狙撃銃は6.5mm弾(三八式実包)を装備部隊、その後開発された九九式短狙撃銃は7.7mm弾(九九式普通実包)を運用している装備部隊に配備されました。九七式狙撃銃の正確な生産挺数は定かではありませんが、小倉工廠約8,000挺、名古屋工廠約14,500挺の計22,500挺程度と言われています。尚、既に生産済みである三八式歩兵銃の中から精度の高い物を選び出し、九七式狙撃銃に準じた改造を施した三八式改狙撃銃も極少数が生産されました。



九九式短小銃は世界各国の主力小銃短縮化の流れに従い、九九式小銃(長小銃)よりも全長が約140mm短い歩兵銃と騎銃の中間サイズのモデルとして、昭和14年に九九式小銃と共に仮制式制定となった小銃です。その後、九九式小銃(長小銃)は生産が早期に終しましたが、九九式短小銃は主力小銃として終戦時までに約250万挺が製造されました。九九式短小銃は当時の日本の状況を反映するように生産時期によって細部の仕様が異なり、特に初期型と末期型では品質や各部の仕様に顕著な違いが見られます。末期型では照尺(リアサイト)が固定式のピープ・サイトとなっているのが大きな特徴です。その他にも銃床が下帯(リア・バンド)位置で分離式となり、木被(アッパー・ハンド・ガード)が下帯までの長さに短縮された他、床尾板(バット・プレート)が木製となるなど、生産性の向上や資源節約の為の仕様変更が各部に見られ、バリエーションにも富んでいます。



U.S. Harpers Ferry Hall Model 1819 Infantry Rifle

US Harpers Ferry
Hall Model 1819
Infantry Rifle
ホール M1819 歩兵銃



全長 1,338mm
口径 .525in.
装弾数 単発



フリント・ロック(火打石式)の時代に後装式の装填機構を取り入れた画期的な小銃で、量産された世界初の軍用後装式小銃となりました。本体下部に設けられたレバーを後方に押してロックを解除しながら上方に持ち上げる事により、撃発機構が組み込まれたブリーチ・ブロックが上昇し、薬室部前方から弾丸と発射薬が直接装填可能となる特殊な後装システムを備えています。このホール式の後装機構はジョン・H・ホールによって設計され、1811年5月21日に特許が取得されました。その後1819年にホールM1819小銃はハーパーズ・フェリーM1803小銃の後継統として合衆国陸軍によって採用されました。ホールM1819歩兵銃の銃身長は32.5インチ(約82.5cm)で、銃身内には16条右回りのライフリングが刻まれていましたが、銃口部分から1.5インチ(約3.8cm)程は滑腔銃身となっていました。ホール小銃の製造はハーパーズ・フェリー造兵廠で行われ、1820年から1830年代までに23,500挺の歩兵銃が生産されました。



ブリーチ・ブロック上面には「J.H.HALL HARPS FERRY U.S. 1819」と「H.FERRY」の他、製造年を示す刻印が入っています。

Colt Model 1855 Revolving Rifle Full Stock Sporting Model

Colt Model 1855
Revolving Rifle
Full Stock Sporting Model
コルト M1855
リボルビング・ライフル
(.56口径 フル・ストック
スポーツティング・モデル)



全長 1,070mm
口径 .56in.
装弾数 5発



コルト "ニュー・モデル" リボルビング ライフルとも呼ばれる、コルト社が1855年から1864年頃にかけて製造した初期の連発式ライフルです。機械的にはコルト M1855 サイド・ハンマー ポケット・リボルバーを拡大したもので、口径や銃身長の異なるライフル・モデル及びカービン・モデルが軍用若しくはスポーツ用として製造されました。本品は1858年以降に生産が本格的に開始された、.56口径モデルで、口径の拡大に伴いフレーム・サイズが大型化された他、装弾数も6発から5発に変更されました。銃身長は24インチで、フォア・エンドが銃口付近まで伸びたフル・ストック・タイプのスポーツティング・モデルです。フォア・エンド内には分割式クリーニング・ロッドの前部(鉄製)を収納加工となっており、クリーニング・ロッドの延長部(真鍮製)はバット・ストック内のコンパートメントに収納されました。リア・サイトは3段階で切り替え可能な起倒式となっています。



フレーム左側面やシリンダーにはコルト社のパテント刻印が入っています。

U.S. Merrill Model 1863 Carbine 2nd Model

US Merrill
Model 1863 Carbine
2nd Model
メリル M1863 カービン
2nd モデル



全長 944mm
口径 .54 Minié
装弾数 単発



1858年にジェームズ・H・メリルによって設計された.54口径の単発後装管打式騎兵銃です。レシーバー上部のブリーチ・レバー両側のラッチを後方に引いてロックを解除し、ブリーチ・レバーを後方上部に大きく起こして装填を行う特殊な構造となっています。ブリーチ・レバーを完全に開放すると、弾薬を薬室内に押し込むブランジャーも運動して後退し、弾薬の装填が可能となります。装填後に再度ブリーチ・レバーを前方に戻すと、ブランジャーが前方に移動して弾薬が薬室内に送り込まれます。撃発は本体右側面のサイド・ロッドにあるハンマーがニップル上に取り付けられた雷管を叩いて行います。1stモデルではバット・ストック右側面に真鍮製のバッヂ・ボックスが設けられており、ブリーチ・レバー両側のラッチがチェックリングの入った板状でしたが、2ndモデルではバッヂ・ボックスが省略され、ラッチがボタン型に変更されました。



J.H. MERRILL BALTO.
PAT. JULY 1858
APL. 9 MAY 21-28-61

U.S. Winchester Model 1866 Yellow Boy Musket

US Winchester
Model 1866 Yellow Boy Musket
ウェインチェスター M1866
イエローボーイ マスケット



全長 1,175mm
口径 .44 Henry
装弾数 16発



ウェインチェスター社で製造されたM1866（イエローボーイ）には、銃身長が20インチのカービンの他に、24インチのライフル・モデル、そして27インチのマスケット（歩兵銃）・モデルが存在します。マスケット・モデルでは銃身が3本のバレル・バンド（マガジン・チューブ1箇所、ハンドガード2箇所）により固定されており、マガジン・チューブ先端より約10cm突出した銃身先端部分にソケット式のスパイク銃剣が装着可能となっているのが特徴です。ウェインチェスター社はマスケット・モデルが軍用として採用される事を期待して営業活動に力を注ぎましたが、結果的に合衆国政府では採用されませんでした。その為、マスケット・モデルの生産量は僅か14,000挺程度に留まりましたが、その多くが当時オスマン帝国であったトルコに輸出されてロシア帝国との露土戦争（1870-71年）で使用され、その連発性能が世界的に評価されました。

WINCHESTER'S-REPEATING-ARMS-NEWHAVEN.CT.
KING'S-IMPROVEMENT-PATENTED-MARCH 29.1866 OCTOBER 16.1860

写真の銃はすべて無可動実銃です。

United States

U.S. Springfield Model 1866 2nd Allin Conversion Trapdoor Rifle



スプリングフィールド造兵廠の主任技師であった E. S. アリン(Erskine S. Allin) の設計した後装機構を使用する小銃で、M1866はM1865に次ぐ2番目のモデルです。アリン・コンバージョン小銃は、米軍が初めて大規模に採用した金属薬莢を使用する後装式单発小銃で、ブリーチ・ブロックを手動で上方に開き弾薬の装填/排莢を行う形態から、「跳ね上げ扉」を意味するトラップドアと呼ばれました。M1865及びM1866は前装式ライフル・マスケットを後装式に改造したモデルで、薬室上半分を切除した後、トラップドア基部を2つのネジにより固定しています。M1866はM1865のエキストラクター等に改良を加えたモデルで、M1865が前装式のライフル・マスケットと同一口径の.58口径リム・ファイア弾を使用したのに対し、M1866では.50口径のセンター・ファイア弾に変更されました。スプリングフィールド造兵廠では、約25,000挺のM1863ライフル・マスケットに対して.50口径への口径変更及び後装式への改造が行われました。

ブリーチ・ブロック前部上面には、モデル名を示す「1866」の刻印及びイニシャル・ヘッドの刻印が入っています。

U.S. Springfield Model 1871 Ward-Burton Infantry Rifle



US Springfield Model 1871
Ward-Burton Infantry Rifle
スプリングフィールド M1871
ウォード・バートン 歩兵銃



全長 1,310mm
口径 .50-70 Govt.
装弾数 単発

米陸軍により使用された最初期のボルト・アクション ライフルの一つです。米陸軍のW.G. Ward将軍とBethel Burton将軍により設計された本銃は、当時の米軍制式小銃弾である.50口径のセンター・ファイア弾を使用する単発の後装式小銃で、コッキング操作はボルト閉鎖時に行われる構造となっていました。本銃は米陸軍のトライアルに向けてマサチューセッツ州のスプリングフィールド造兵廠で歩兵銃モデルが1,011挺製造された他、騎兵銃モデルも316挺が製造されました。製造された本銃の大半は1871年に米軍が実施したトライアルに投入されましたが、当時トラップドア式小銃の優位性を疑わなかった軍部の保守派やトライアルを行った部隊からの評価は芳しいものでは無く、試験的な運用に留まりました。しかしながら本銃は金属製薬莢を使用する米陸軍初かつ米国造兵廠が製造した最初のボルト・アクションライフルであつた点において、米国銃砲開発史を語る上で重要なモデルです。



写真的銃はすべて無可動実銃です。

U.S. Navy Winchester-Lee Model 1895 Infantry Rifle

USN Winchester-Lee
Model 1895 Infantry Rifle
USN ウィンチェスター・リー
M1895 歩兵銃



全長 1,210mm
口径 6mm×60SR
(6mm Lee Navy)
装弾数 5発



米海軍部隊及び海兵隊用として1895年に採用された連発式小銃で、1894年まで米国海軍独自で研究が進められていた小口径無煙火薬弾を使用します。5発用のクリップにより装弾を行うシングル・カラムの固定式弾倉を備えており、特殊なカム・アクション・ストレート・ブルと呼ばれるボルト・アクション機構により作動します。この方式ではボルト・ハンドルを若干持ち上げ気味に後方に引く事により、ボルトがレシーバーのウェッジ・ロックから開放される構造となっています。本銃のストレート・ブル方式は速射性に優れている事が評価されましたが、1898年初頭の海兵隊によるキューバでの実戦使用の結果、ファイアリング・ピン・ロックとボルト・ロック・アクチュエータの脆弱さが第一線兵器としては不適格である事が判明しました。本銃は海兵隊では1900年1月にクラグ小銃により全て置き換えられましたが、海軍では1920年代まで海外派遣される艦艇に装備されていました。



Marlin Model 1893 Safety Rifle

Marlin Model 1893
Safety Rifle
マーリン M1893
セーフティ・ライフル



全長 1,130mm
口径 .38-55 Win
装弾数 10発



ウィンチェスター社のM1894とほぼ同時期に米国のマーリン社で生産が開始され、構造的にも近い事からライバルとして語られる事も多いレバー・アクション・ライフルです。1881年にマーリン社はウィンチェスター社に先駆けて.45-70 Government等の強力なライフル弾が発射可能なM1881を発表し、1892年までに約2万挺を生産しましたが、1893年からはその後継機種としてM1893の生産が開始されました。ウィンチェスターM1894ではボルト後退時にレシーバー上部が開放されるのに対して、マーリンM1893ではレシーバー右側面上部が開放される構造であった事から、雨や異物侵入防止の観点から有利となっていました。マーリン社はこれを安全性と結び付け、機関部上部に「MARLIN SAFETY」という刻印を入れてウィンチェスター社製のレバー・アクション・ライフルに対抗しました。M1893はマーリン社が製造したレバー・アクションの中で最も人気のあったモデルの一つで、1893年から1936年まで100万挺以上が生産されました。



機関部上面に「MARLIN SAFETY」の刻印が入っている他、銃身にはマーリン社のアドレス刻印及びバッテント刻印が打刻されています。

写真の銃はすべて無可動実銃です。

United States

U.S. M1 Garand Rifle

US M1 Garand Rifle
M1 ガーランド ライフル



全長 1,103mm
口径 .30-06
装弾数 8発



1936年に米軍制式となった自動小銃で、開発者ジョン・C・ガーランドの名前からガーランド ライフルと呼ばれています。生産自体は1937年から始まりましたが、実際に量産体制に入ったのは1940年頃からです。しかししながら、本銃は1945年の第二次世界大戦終結時までにスプリングフィールド造兵廠及びウィンチェスター社で約400万挺が製造されました。更にその後の朝鮮戦争時にも生産が再開され、約140万挺が製造されました。世界的にボルト・アクション・ライフルを主力小銃として使用していた時代に自動小銃を主力としたのは、工業力を持ったアメリカならではといえます。着脱式のマガジンではなく特殊な装弾子（エンブロック・クリップ）を使用する点や、この独特的な装填システムのために弾薬の補充給弾が難しい点など、自動小銃としては過渡期ならではとも言える個性的なメカニズムを備えた統でした。戦後は各国に供与され、自衛隊でもM1小銃の名称で使用されました。



U.S. M1C Garand Sniper Rifle

US M1C Garand Sniper Rifle
M1C ガーランド 狙撃銃



全長 1,103mm
口径 .30-06
装弾数 8発



M1ガーランド ライフルに2.5倍スコープを取り付けた狙撃銃です。スコープ・マウントはネジ留めによりレシーバー左側面に直接固定されており、装着されるスコープはその後のM1D狙撃銃用のM84スコープとは異なるM81及びM82と呼ばれるタイプが使用されました。M1C狙撃銃は第二次世界大戦中にスプリングフィールド造兵廠だけで7,971挺製造されました。終戦までに実戦部隊へ配備されたかった為、大戦中には戦場での試験を行う事が出来ませんでした。その後の朝鮮戦争でM1Cは米陸軍の標準狙撃銃として配備され、追加で4,796挺が生産されました。実戦使用により最大有効射程が600ヤード（約550m）で、450ヤード（約400m）から600ヤードの距離でもある程度信頼できる性能がある事が証明されました。しかしながら、600ヤードの最大有効射程を得るには、マッチ・ターゲット弾を使用しなければ難しかったと言われています。M1C狙撃銃はベトナム戦争勃発時まで制式狙撃銃として使用されました。



スコープ・マウントはレシーバー左側面にネジ留めにより直接固定されています。

U.S. Model 1941 Johnson Rifle

US Model 1941
Johnson Rifle
ジョンソン M1941
自動小銃



全長 1,156mm
口径 .30-06
装弾数 10発



メルヴィン・C・ジョンソンが設計し、1941年に米海兵隊の空挺部隊など一部が採用した自動小銃です。作動方式は反動利用のショート・リコイル式で、8個のロッキング・ラグによるローテイティング・ボルト式の閉鎖機構を持ち、特徴的な回転式弾倉を装備するなど、特殊な構造を備えています。M1ガーランドライフルに比べて反動が小さく、装弾数が10発と弾倉容量の点でも有利であった他、弾倉に弾薬が残っておりかつボルトが閉鎖状態であっても弾薬を追加装填できるといった点で優れていました。しかしながら、本銃は上下方向の集弾性が分散した他、M1ガーランドに比べて細かい部品が多く、通常分解時にそれらを紛失する恐れがありました。また、重量のある銃剣を銃身に装着した際に作動不良が発生する恐れがあった為、専用のスパイク銃剣が用意されていました。本銃は海兵隊が増産を求めたものの、結果的に第二次世界大戦中3万挺ほどが生産されたに留まりました。



回転式弾倉への装填は、本体右側面からM1903小銃用の5連クリップにより迅速に行う事が可能です。

U.S. M1 Carbine

US M1 Carbine
M1 カービン



全長 905mm
口径 7.62mm×33 (.30 Carbine)
装弾数 15/30発



警備用及び下士官の軽量な自衛用火器として1941年に米軍が採用した自動小銃です。開発はウィンチェスター社で行われましたが、大戦中には他に8社が製造に加わりました。採用当時はフルサイズのライフル弾が全盛の時代であり、当初は威力不足を指摘されましたが、下士官や警備兵が使用する場合、本体が軽量で拳銃よりも射程と威力が有り、さらに射撃時の反動も少なかった為、広く使われる事となりました。また、そのコンパクトなサイズから、戦車やハーフトラック等の車両にも多くが装備されていました。M1カービンは製造時期やメーカーにより各部に細かな違いが見られ、1943年以降は着剣装置の追加やフリップ・サイトからアジャスタブル・サイトへの変更の他、セーフティがブッシュ式から回転式に変更となるなど追加改良が加えられました。後期生産品ではリア・サイトがスライド式のアジャスタブル・サイトへと変更されました。一部にプレス加工を用いたタイプも製造されました。



写真の銃はすべて無可動実銃です。

United States

U.S. M16A1 Assault Rifle

US M16A1
Assault Rifle
M16A1 自動小銃



全長 986mm
口径 5.56mm×45
装弾数 20/30発



米国アーマライト社のユージン・ストーナーが設計し、コルト社が製造を行って1962年に米空軍が採用したM16（コルト社内モデル名AR-15・M601）の改良型です。1967年にそれまでの仮製式名であるXM16E1に代わり、M16A1の陸軍制式名が与えされました。M16A1（コルト社内モデル名M603）は、仮製式モデルであるXM16E1（陸軍向けM602）と同様にボルト・フォワード・アシストを備えており、マガジンから薬室への装填不良が発生した際にもボルトを手動で前進させる事が可能となっています。M16A1ではマガジン・リリース・ボタンの誤操作を防ぐ為のリップが追加された他、ボルトを始め内部部品が強化されました。M16A1はベトナム戦争拡大に伴う大量の需要に応える為、コルト社以外にもゼネラル・モータースのハイドロ・マチック・ディビジョン及びハーリントン＆リチャードソン社でも生産が行われました。また、輸出向けとしても大量に生産され、これらの輸出向けM16A1にはM613のコルト社内モデル名が与えられました。



U.S. M16A2 Assault Rifle

US M16A2
Assault Rifle
M16A2 自動小銃



全長 1,001mm
口径 5.56mm×45
装弾数 20/30発



M16A1の改良型で、M16A1E1と呼ばれる試作名称を経て1982年12月に米軍制式となりました。M16A1で使用された.223 レミントン弾（米軍制式名M193）に代わって、より弾頭が重い5.56mm NATO弾 SS109（米軍制式名M855）に対応する為、ライフリング・ピッチがM16A1の1:12（※12インチで1回転）から1:7へと変更されており、銃身もヘビー・バレル化されています。射撃機能はフル・オートマチック射撃を廃して3点バースト射撃機構が組み込まれています。リア・サイトは多段階調整式へと変更されており、排莢室後方にカートリッジ・ディフレクターと呼ばれる突起が追加されました。ハンドガードはM16A1が装備していた三角断面の左右分割式に代わり、円筒形で上下分割式のタイプに変更されました。ハンドガード及び銃床の材質は高強度のナイロン系樹脂製となり、銃床は若干延長されています。バード・ケージ型のフラッシュ・ハイダーも射撃時に砂塵を巻き上げないよう下面にスリットの無いタイプとなりました。



リア・サイトのエレベーション及びウインデジ
はダイヤルにより調整可能となっています。

LMT LM308MWS Self-loading Rifle



英軍が採用している狙撃銃「L129A1」の民間仕様モデルです。MWSとは「Modular Weapon System」の略で、鍛造のアルミニウム製アッパー・レシーバーとハンドガードが一体成型されたMRP (Monolithic Rail Platform)と呼ばれるレール・システムにより高い本体剛性と拡張性を備えています。軍用バージョンであるL129A1は、装甲車両や火力支援拠点から離れて行動する歩兵の支援を目的として分隊や小隊規模での使用を想定して開発され、HK 417やFN SCAR-H Mk.17, XR-10などの7.62mm小銃とのトライアルを経て英軍に採用されました。L129A1は米国のルイス・マシン・ツール (LMT) 社によって製造され、LEI社によって英国に納入されています。L129A1の銃身はステンレス製のフリー・ブローティング・バレルとなっており、銃身先端にはショアファイア製のサイレンサー・アダプター兼用フラッシュ・ハイダーが装着されています。L129A1は屋外で通常弾を使用して800mまでの距離でマン・ターゲットに容易に命中させられるだけの精度を備えていると言われています。



MAC-11 Sub Machinegun



ゴードン・B・イングラムにより特殊部隊用に開発された小型短機関銃で、9mm×19弾もしくは.45 ACP弾を使用するMAC-10短機関銃とともに米国のMAC社 (Military Armament Corporation)で製造が行われました。.380ACP弾を使用するMAC-11短機関銃では、MAC-10に比べて本体サイズが大幅にスケール・ダウンされています。尚、スケール・ダウンによりボルトの後退量が短くなつた事から、発射速度は約1,200発/分と非常に高速となりました。基本構造としてはイスラエルのUZI短機関銃と同様に、L型のテレスコピング・ボルトのメリットを最大限に利用したコンパクトな設計となつており、プローパック方式によりオープン・ボルト位置から射撃を行います。また、設計当初からMAC社傘下のSIONICS製サイレンサーを装着出来るよう設計されているのも特徴です。MAC社ではMAC-10及びMAC-11の生産を1973年に終了し1975年に倒産しましたが、その後も製造権を引き継いだ複数のメーカーにより生産が続けられた他、派生モデルやコピー品が製造されました。



写真の銃はすべて無可動実銃です。(サイレンサーも加工済みです)

Winchester Model 1897 Takedown Shotgun

Winchester Model 1897
Takedown Shotgun
ワインチェスター M1897
テイク・ダウン ショットガン



全長 968mm
口径 12GA
装弾数 5発



ワインチェスター社による初のポンプ・アクション式ショットガンであるM1893の改良型として、1897年に発表されたモデルです。設計者はジョン・M・ブローニングで、M1893の基本設計を引き継ぎながらも、当時急速に普及しつつあった無煙火薬仕様の装弾に対応する為、レシーバーの強度を高めた他、装填や排莢の確実性を高めるためシェル・ガイドやエジェクション・ポート形状にも改良が加えられました。また、誤操作による暴発を防ぐ為、アクション・スライド・ロックが導入され、安全性も高められています。これらの改良によりM1897は高い信頼性を誇り、バランスのとれたデザインも相まって発売初期から大きな人気を博してその地位を確固たるものとしました。M1897は当初ソリッド・フレーム・モデルが基本仕様として発売されました。その後バレルとレシーバーを分割可能なテイク・ダウン・モデルも発売され、1957年に生産が終了するまでに100万挺以上製造されました。



Winchester Model 1912 Shotgun

Winchester Model 1912
Shotgun
ワインチェスター M1912
ショットガン



全長 1,020mm
口径 12GA
装弾数 5発



ワインチェスター M1897の改良型として発表されたポンプ・アクション式ショットガンです。M1897の完成度は高かったものの、外装式ハンマーゆえに開口部が多く、異物侵入による作動不良を起こす可能性がありました。また、ブリーチ・ボルトが後退する構造は、グリップ方法を誤ると後退したボルトが射手の手に衝突する恐れがありました。これらの欠点を改善する為、トマス・C・ジョンソンにより再設計が行われ、ハンマー内蔵式としてボルトの作動範囲をレシーバー内に収めた他、開口部を排莢孔と装填孔に絞る事により、作動の信頼性や操作性が高められました。更に口径や銃身・薬室長の他、装備や仕上げの異なるグレード展開が行われて様々な需要に対応した事により、米国内外で官民間わざ高い人気を博し、1964年に製造が終了するまで約200万挺が製造されました。米軍では陸軍や海兵隊がM1897と併せて多数調達した他、海軍や陸軍航空隊の警備任務にも用いられました。



本品の銃身にはワインチェスター社のアドレス刻印の他、3インチのSUPER SPEED 及びSUPER-X装弾に対応している事を示す刻印が入っています。
写真の銃はすべて無可動実銃です。

Imperial Germany

Gew.91 Short Rifle



Gew.91 Short Rifle
Gew.91 短小銃



全長 960mm
口径 7.92mm×57
装弾数 5発

MG 08/15 Light Machinegun



MG08/15
Light Machinegun
MG08/15 軽機関銃



全長 1,410mm
口径 7.92mm×57
装弾数 ベルト給弾

1888年にドイツ帝国陸軍制式となったGew.88歩兵銃の騎兵銃モデルであるKar.88をベースに、叉銃用突起を追加したモデルです。当時小銃を主力火器としない砲兵等の兵科では、補助火器としてKar.88騎兵銃が1890年頃から運用されていましたが、補助火器であるが故に使用しない際には叉銃を行う必要性が高いものでした。そのため間もなく叉銃用突起を装備した改良型であるGew.91短小銃が採用され、騎兵以外の兵科の補助火器として配備されました。反対に騎兵時に使用する革製スキャバードへの収納時に叉銃用突起が引っ掛かる恐れがあった事から、Gew.91短小銃は騎兵には支給されませんでした。Gew.91短小銃は補助火器として採用されたため65,000挺程の生産に留まりましたが、1909年にGew.98小銃の短縮型であるKar.98a小銃が採用されるまで砲兵等によって使用されました。更に第一次世界大戦勃発後もKar.98aに比べ軽量でコンパクトであった事から、艦載重兵や自転車部隊、伝令兵、気球搭乗員により重宝されました。



本品の裏面にはチューリンゲンのエアフルト造兵廠で1896年に製造された事を示す刻印が入っています。

ドイツ軍初の制式機関銃であるMG08重機関銃を基に開発された軽機関銃です。ベースとなったMG08重機関銃はマキシム機関銃を基に設計され、基本構造はほぼそのままに使用弾薬をドイツ軍制式の8mmモーゼル(7.92mm×57)弾としています。射撃は布製の250連アモ・ベルトを使用して行い、連続射撃時の銃身過熱を抑える為、銃身の周囲に約3.7リットルの冷却水を収容可能な水冷ジャケットを装備しました。MG08にはソリ型銃座が標準装備されましたが、対空銃座としても使用できる三脚も使用されました。1915年に追加制式されたMG08/15軽機関銃は、MG08重機関銃を基に銃座を廃して短い二脚を装備した他、バット・ストックとピストル・グリップを装着して軽機関銃的な運用を可能としたモデルです。レシーバーの軽量化の他、水冷ジャケットの直径を小さくする事により重量は18kgにまで軽減されています。更に本体側面に弾帯収納用のベルト・ドラムを装着可能とする事で携行性が大幅に向上了しました。



二脚には高さ調節機能は無く、ロックを解除しながら基部を回転させて取り外す事が可能です。

写真の銃はすべて無可動実物です。

Gew.24(t) Short Rifle

Gew.24(t) Short Rifle
Gew.24(t) 短小銃



全長 1,050mm
口径 7.92mm×57
装弾数 5発



チェコスロバキアで開発されたVz.24小銃をドイツ軍仕様に改良し、第二次世界大戦中に生産されたモデルです。1938年のドイツによる併合当時、チェコスロバキアのPovažská Bystrica工場では国内向け及び輸出用としてVz.24の製造を行っていましたが、ドイツは併合後も枢軸国側のルーマニアから受注したVz.24の生産を同工場で続行する事を承認し、受注分の生産完了後はドイツ軍向けにGew.24(t)の製造に移行しました。Gew.24(t)ではストックにKar.98k小銃と同様のスリング取り付け穴及びボルト分解用ディスクが追加されており、銃剣はKar.98kと共通の物が使用可能です。初期生産品では銃床が単材製でしたが、その後合板製の銃床を装備した品も製造されました。また、1942年頃になるとフラット型バット・ブレードの部品枯渇に伴い、カップ型の物を取り付けて製造されました。Gew.24(t)は1941年から1942年にかけて約255,000挺が製造されましたが、その後戦前に製造された部品の在庫が枯渇した為、Kar.98kの生産へと完全に移行しました。



Gew.98/40 Short Rifle

Gew.98/40 Short Rifle
Gew.98/40 短小銃



全長 1,107mm
口径 7.92mm×57
装弾数 5発



1935年にハンガリー軍制式となった35M小銃を基に、第二次世界大戦中にドイツ軍向けとして改良を加え製造したモデルです。原型である35M小銃は、オーストリアのマンリッヒャー小銃の影響を受けていますが、ボルトの構造がストレート・ブル方式から一般的な回転式に変更されている他、銃床が二分割構造となっています。機関部後部にはマンリッヒャー方式と同様のコッキング・ビースが備えられており、ボルト・ハンドルを操作する事なくコッキング操作が可能ですが、尚、弾倉の構造及びクリップによる給弾方法はモーゼル方式となっています。ドイツでは35M小銃の使用弾薬を7.92mm×57弾に変更し、ボルト・ハンドルや銃剣、スリング取り付け部の形状をKar.98k小銃と同規格に変更する等の改良を施したモデルをGew.98/40の名称で使用しました。Gew.98/40は1941年から1944年にかけてハンガリー・ブダペストのFÉG及びダヌビア機械工場で138,400挺が製造され、ハンガリーでも小改良型を43M小銃として採用されました。



銃床は二分割構造となっており、機関部後部にはマンリッヒャー方式と同様のコッキング・ビースが備えられています。

写真の銃はすべて無可動実銃です。

Mauser Gew.41 (M) Self-loading Rifle

Mauser Gew.41 (M)
Self-loading Rifle
モーゼル Gew.41 (M)
自動小銃



全長 1,177mm
口径 7.92mm×57
装弾数 10発



Walther Gew.41 (W) Self-loading Rifle

Walther Gew.41 (W)
Self-loading Rifle
ワルサー Gew.41 (W)
自動小銃



全長 1,125mm
口径 7.92mm×57
装弾数 10発



第二次世界大戦中にドイツのモーゼル社で開発された半自動小銃です。同時にワルサー社でも同じGew.41のモデル名を持つGew.41 (W)が開発され、結果的にワルサー社製が量産される事となつたため、Gew.41 (M)は少数の生産に留まりました。Gew.41 (M)はボルト・アクション・ライフルと同様のコッキング・ハンドルを持ち、Kar.98k小銃に近い操作性を備えています。作動方式はGew.41 (W)と同様、銃口部に設けられた筒状のガストラップが発射ガスの圧力を受け、ピストン・ロッドを作動させます。コッキング・ハンドルを操作して手動装填する際には、自動的にボルト・アッセンブリとリコイル・スプリングの連結が解除されます。機関部上面のカバーを開く事により、ボルト・アッセンブリの取り外しが可能です。弾倉は固定式で本体上部からKar.98k用の5連クリップを用いて装弾を行いました。Gew.41 (M)の生産数は6,673挺に留まり、その内1,673挺が使用不能として返品された為、現存数が非常に少なくなっています。



薬室上面には「G.41(M)」の
モデル名刻印と共に、製造年
を示す刻印が入っています。

ドイツのワルサー社で第二次世界大戦中に開発された半自動小銃です。開戦翌年の1940年に陸軍兵器局からモーゼル社及びワルサー社他数社に対して新型半自動小銃の試作命令が出され、モーゼル社設計のGew.41 (M)とワルサー社設計のGew.41 (W)がいずれも少数生産されて実験的に実戦投入が行われました。その後、1942年12月にワルサー社製のGew.41 (W)がGewehr 41として制式採用となり、その後の生産品はモデル名から(W)の表記がなくなりました。しかしながら、Gew.41は未だガス・システムを中心とした機関部に問題を残しており、軍からさらなる改良が求められた為、ワルサー社ではトカラフSVT-40自動小銃やシモノフAVS-36自動小銃を参考にしたと思われるガス圧利用システムをGew.41に組み込む等の改良を行い、Gew.43自動小銃が完成される事になりました。Gew.41自動小銃は、Gew.43の採用後もワルサー (ac) とベルリン・リューベッカー (duv) の2社により1944年初めまで生産が続けられたとされています。



写真の銃はすべて無可動実銃です。

Heckler & Koch G36KV Assault Rifle



Heckler & Koch G36KV
Assault Rifle
HK G36K 自動小銃

全長 830mm(610mm)
口径 5.56mm×45
装弾数 30発



Heckler & Koch HK416 Assault Rifle



Heckler & Koch HK416
Assault Rifle
HK416 自動小銃

全長 805mm(730mm)
口径 5.56mm×45
装弾数 30発



G36はドイツのHeckler & Koch (HK) 社が1990年代前半に開発した自動小銃で、1996年にGew.3自動小銃の後継としてドイツ連邦軍制式となりました。G36自動小銃は外装に樹脂部品が多用されており、作動方式はGew.3やHK33自動小銃で採用されていたローラー遅延プローバック方式ではなく、よりオーソドックスなショート・ストローク・ピストン式を採用しています。G36自動小銃にはバリエーションとして銃身短縮型のG36K (Kurz)と呼ばれるショート・モデル及び最もコンパクトなモデルであるG36C (Compact) が存在します。尚、G36の輸出向けモデルは、以前はG36EやG36KEと呼称されていましたが、現行モデルではG36VやG36KVのモデル名が与えられています。G36シリーズの現行モデルでは、キャリング・ハンドル内蔵のスコープを廃してピカティニー・レールを装備し、各種光学機器を取り付け可能としたモデルも製造されています。尚、短縮モデルであるG36K (KV) 及びG36C (CV) では着剣装置が省略されています。



本体左側面にはHK社のロゴの他、「G36KV」のモデル名や口径表示刻印が入っています。

米陸軍からM4カービンの改修要請を受けたドイツのHeckler & Koch (HK) 社が開発した自動小銃です。作動の確実性や耐久性を向上させる為、作動機構がM4カービンのダイレクト・インピングメント式からショート・ストローク・ピストン式へと変更されているのが特徴です。また、ピカティニー・レール・システムが標準装備されている他、マガジンの材質もスチール製に変更されています。尚、HK416には用途に応じて11~20インチまでの銃身長の異なるバリエーションが存在します。HK416の製造はHKの米国現地法人であるHK Defense USAでも行われており、米国の公的機関向けに製造・納入されたモデルはHK416Dと呼ばれます。HK416は当初の発注元である米軍やブルウェー軍等で制式採用されている他、各国の特殊部隊等でも運用されています。尚、HK416の派生モデルとして7.62mm×51弾を使用する大口径モデルであるHK417の他、セミ・オートマチック射撃のみに限定したMR223 (MR556) といったバリエーションも製造されています。



Enfield Pattern 1842 Sea Service Percussion Musket

Enfield Pattern 1842
Sea Service
Percussion Musket
エンフィールド P1842
海軍用短小銃



全長 1,080mm
口径 .753 in.
装弾数 単発



通称「タワー・ライフル」とも呼ばれる、エンフィールド型のサイド・ロックを持ち、銃身内にライフリングのない滑腔銃身を備えた前装管打式小銃のバリエーションの一つです。1839年にそれまでのフリント・ロック小銃をベースにバーカッション・ロックに改造されたのがP1839小銃で、サイド・プレートにフリント・ロックの名残がありました。P1842は1842年に英軍制式となったモデルで、当初から前装管打式として製造された英軍初の小銃です。その中でもP1842海軍用短小銃は2バンド小銃と騎兵銃の中間サイズのモデルです。滑腔銃身で射程も短かったためリア・サイトではなく、散弾銃の様にフロント・サイトと銃身上の線で照準を行いました。銃口付近の銃身下部に独特のレバー式着剣装置が付いており、古いタイプのソケット型銃剣を装着可能であった事から、ミニエー弾を使用する施条銃の制式化後も、最新式の陸上装備を必要としない海軍用として長らく使用されました。



銃口付近の銃身下部にはレバー式の着剣装置が装備されています。

Westley Richards Breech-loading Carbine

Westley Richards
Breech-loading Carbine
ウエスリー・リチャーズ
後装管打式騎兵銃



全長 1,000mm
口径 .451 in.
装弾数 単発



英國陸軍で前装式のエンフィールド小銃を後装式に改良するトライアルに提出された後装式小銃の一つです。本銃の後装方式は、猿の尻尾（モンキー・テイル）に似たツマミを引き上げることによってブリーチを開き、そこから紙薬包式の弾薬を装填します。尚、弾薬の装填操作とは別に、ハーフ・コック状態でバーカッション・ニップルに雷管を被せる必要がありました。本銃は構造が複雑で製造コストが高かった事から、結果的には改良が容易で安価かつ堅牢な構造のスナイドル小銃が採用されました。しかしながら、スナイドル小銃が制式採用されるまでモント・ストーム小銃に並び有力な候補であった為、英國陸軍省では2,000挺を購入し、騎兵用に支給しました。また、英軍の次期制式小銃の座を逃した後も、ポルトガル軍や南アフリカのボア軍を始め諸外国の軍隊で使用されました。本品はフル・ピストル・グリップ・タイプのストックが付いた非常に珍しい特注品です。



機関部後部のツマミを持ち上げてブリーチを開け、弾薬の装填を行います。

写真の銃はすべて無可動実銃です。

Martini-Henry Mk II Rifle .22LR Conversion

Martini-Henry Mk II Rifle
.22LR Conversion
マルティニ・ヘンリー Mk II
.22口径コンバージョン
歩兵銃



全長 1,179mm
口径 .22LR
装弾数 単発



マルティニ・ヘンリー小銃は、主に19世紀後半に英国とその植民地で使用された単発式のレバー・アクション・ライフルです。マルティニ・ヘンリーMk IIは1876年より生産されたモデルで、バット・プレートが平坦な形状となり、Mk Iでは真鍮製であったブリーチ・ビボット・ピンを鉄製に改めるなど細かな改良が見られます。Mk II小銃は、ズールー戦争など英國植民地での戦争に数多く投入されました。19世紀末に英陸軍はマルティニ系小銃を軍のトレーニング用として再利用し、一部は競技射撃用として民間に払い下げられました。当時英國では陸軍が民間射撃クラブを後援する事で国民の射撃技術を向上し、将来的に大規模な戦争が必要になった際の基礎訓練の簡略化が図られました。射撃クラブで使用される銃は、バーミンガム銃器製造協会の主要メンバーであるBirmingham Small Arms (BSA)社、Parker-Hale社、W.W. Greener社、C.G. Bonehill社等によりマルティニ系小銃を .310口径や .22LR口径に改造して供給されました。



Short, Magazine Lee-Enfield Rifle No.1 Mk III

Short Magazine Lee-Enfield
Rifle No.1 Mk III
SMLE No.1 Mk III 小銃



全長 1,132mm
口径 7.7mm×56R
(.303 British)
装弾数 10発



SMLE No.1 Mk Iを改良して1907年に英軍制式となったボルト・アクション・ライフルです。SMLE小銃はボルトのロッキング・ラグが同時期の他のボルト・アクション・ライフルと比較して後部に配置されていた為、ボルト・ストロークが短く速射性に優っていました。No.1 Mk IIIではリア・サイトが簡略化された他、No.1 Mk Iではボルト・ヘッドに設けられていたクリップ・チャージャー機能が本体側に移されました。また、ハンドガードやマガジンのデザインも変更され、薬室形状も高初速の尖頭弾であるMK VII弾を使用出来るよう改良が加えられています。イギリスでの製造は1943年まで行われましたが、インド、オーストラリアでは50年代まで生産が続けられました。SMLE No.1小銃はその後、第二次世界大戦中期以降のイギリス軍主力小銃となったNo.4小銃への更新が徐々に行われましたが、最終的にはL1A1自動小銃が採用されるまで、シリーズを通して実に約60年間主力小銃であり続けた英軍を代表する名銃です。



機関部右側面にはマガジン・カットオフ機能が裝備されています。(改良型のNo.1 Mk III*版)

写真の銃はすべて無可動実積です。

Rifle No.4 Mk I* “U.S. PROPERTY” mfd. by Stevens-Savage

Rifle No.4 Mk I*
“U.S. PROPERTY”
mfd. by Stevens-Savage
No.4 Mk I* 小銃
(U.S. PROPERTY刻印、
スティーブンス・サベージ社製)



全長 1,128mm
口径 7.7mm×56R
(.303 British)
装弾数 10発



No.4 Mk I小銃はSMLE No.1の改良型で、第二次世界大戦中期以降のイギリス軍主力小銃です。ダンケルク撤退で小銃不足となった1941年から大量生産が開始されました。SMLE No.1小銃からの変更点として、リア・サイトが機関部後部に移された他、銃床前部より突出した銃身先端にスパイク・バヨネットを装着する着剣方式となりました。No.4 Mk Iの生産性向上型であるNo.4 Mk I*ではボルトの取り外し方法が変更され、Mk Iのチャージャー・ブリッジ後部に設けられていたボルト・ヘッド・キャップが廃され、チャージャー・ブリッジとボルト・ヘッドのクリアランスが広げられました。また、リア・サイトを始め、各部の省力化も行われました。大戦中は英國造兵廠の多くのドイツ軍の爆撃にさらされた為、多くのNo.4 Mk I及びMk I*小銃がカナダ及びアメリカのサベージ社で製造され、レンドリース法に基づきイギリスに供給が行われました。米国で製造された個体には「U.S. PROPERTY」の刻印が入っています。



L85A1 (SA80) Bullpup Assault Rifle



L85A1 (SA80)
Bullpup Assault Rifle
L85A1 (SA80) 自動小銃



全長 785mm
口径 5.56mm×45
装弾数 30発

1980年代にL1A1の後継として英國陸軍制式となった自動小銃で、分隊支援火器モデル等を含むウェポン・システムはSA80と呼ばれます。1970年代後半に5.56mm×45弾がNATO制式となる以前、英國では独自の小口径高速弾である4.85mm×49弾を開発し、これを使用するXL64 IW自動小銃が試作されていました。XL64の内部機構はアーマライトAR-18を原型としており、これをブルパップ式のレシーバーに収めた構造となっていました。その後、NATO制式弾薬として5.56mm SS-109弾の採用が決定すると、XL64の使用弾薬をSS-109へと変更したXL70が開発され、1985年にL85A1として制式となりました。しかしながらL85A1は設計上の欠陥により信頼性が低く、作動不良が頻発しました。さらに操作性や整備性にも問題が有った事から、2000年から2002年にかけてドイツのHeckler & Koch社によって20万挺のL85A1がL85A2へと改修されました。L85A2ではエキストラクターやコッキング・ハンドル、マガジン等に各種改良が加えられ、作動不良の発生率が大幅に減少しました。



本体上部にはリア・サイトを内蔵する着脱式キャリング・ハンドルの代わりにSUSAT光学照準器を搭載可能です。

STEN Mk V Machine Carbine



Single Shot 8 Gauge Shotgun

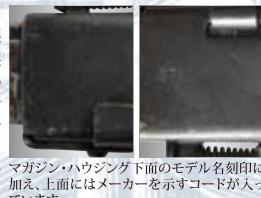
Single Shot 8 Gauge
Shotgun
8番 単発散弾銃



全長 1,320mm
口径 8GA
装弾数 単発



1944年から生産が行われ、1953年まで英軍で採用されていたステン短機関銃の最終量産型です。それまでの生産性を追及していたモデルに比べ、木製のピストル・グリップ及びバット・ストックを追加した他、着剣装置やSMLEと同様のフロント・サイトを装備するなど操作性が向上しています。当初は空挺部隊用の装備として運用されました。その後他の部隊でも使用されるようになりました。基本的にはステンMk IIの設計を基にしており、トリガー・グループをやや後方に延長して出来たスペースに木製グリップを配置しています。当初はバレル・ジャケットに木製フォア・グリップも装備していましたが、1945年以降は全ての生産品で省略されました。マガジンはステンMk IIと共用ですが、Mk V採用後にマガジン背面の残弾確認用の窓が省略されました。多くのステン短機関銃が第二次世界大戦終結後に退役したのに対し、ステンMk Vは1953年まで現役でスエズ動乱や朝鮮戦争でも使用されました。



黒色火薬仕様の装弾を使用する初期の英國製センター・ファイア・ショットガンです。本品は19世紀後半に製造された、非常に珍しい8ゲージ(8番)という超大口径の散弾銃です。8ゲージとは1/8 ポンドの鉛球に相当する直徑(21.21mm)の強力な弾を使用する、黒色火薬の時代にだけ使用された口径です。大口径のスラッグ弾(一粒弾)を使用することで大熊や象、トドを仕留められるだけの強大なストッピング・パワーを持ち、当時でも限られたハンターのみが使用しました。本品は36インチのフル・ショーケ、ダマスカス・ダブル・ツイスト・バレルのハンマー・ガン(有鶴頭銃)で、サイド・ロックはバック・アクション・ロックと呼ばれる古いタイプとなっています。トリガー・ガードの下に設けられたオペレーティング・レバーは、Henry Jonesが1852年に特許を取得したJones Rotary Under Lever Systemと呼ばれる方式で、レバーを右側に回転させると銃身がブレイク・オープンして薬室が開放されます。



写真の銃はすべて無可動実績です。

Vetterli M1870/87/15 Infantry Rifle

Vetterli M1870/15
Infantry Rifle
ベテューリ M1870/87/15
歩兵銃



全長 1,346mm
口径 6.5mm×52
弾薬数 6発



Carcano M1938 Short Rifle

Carcano M1938
Short Rifle
カルカノ M1938
短小銃



全長 1,015mm
口径 7.35mm×51
弾薬数 6発



ベテューリ M1870 小銃は、カルカノ M1891 小銃が採用される以前のイタリア軍の主力小銃です。基本構造はスイスで開発されたベテューリ式のボルト・アクション機構に改良を加えたもので、カルカノ M1867 小銃の後継として 1870 年に単発式のベテューリ M1870 小銃が開発されました。M1870 はイタリア軍最初の金属薬莢を使用する主力小銃で、Brescia, Terni, Torino, Torre Annunziata の各造兵廠で生産が行われました。その後、列強の主力小銃の連発化に伴い、1887 年には M1870 をベースにビタリ式の弾倉を追加して連發式とした M1870/87 小銃が開発されました。M1870/87 小銃は、スイスのベテューリ小銃と混同しないように、欧米ではベテューリ・ビタリと呼ばれています。更に第一次世界大戦中の 1915 年には、口径をカルカノ M1891 小銃と同じ 6.5mm へと変更した M1870/87/15 と呼ばれるモデルも開発され、主に砲兵や輜重兵等の小銃を主武装としない部隊の防衛用に使用されました。M1870/87/15 小銃は M1870/87 小銃と同系統の弾薬が異なるため、弾倉の形状も変更されています。



1891年に採用されたカルカノ M1891 歩兵銃を基に、口径を拡大し全長を短縮した短小銃モデルです。カルカノ小銃は機関部をモーゼル方式、弾倉はエンブロッブクリップを使用するマンリッカ方式を改良して用いており、この機構をカルカノ式と呼びます。列強における主力小銃の大口径化及び歩兵銃と騎兵銃の共用化に後れをとったイタリアは、1938年に M1891 歩兵銃の後継として使用弾薬をより強力な 7.35mm×51 に変更し、全長を短縮して携行し易く改良した M1938 短小銃を開発しました。M1938 短小銃は大口径化および全長の短縮の他に、照尺を 300mm 固定式に変更することにより、生産の簡略化も図られていました。しかしながら第二次世界大戦が勃発すると、イタリア軍では新型の 7.35mm 弾の供給が不足したため再び主力小銃の口径を 6.5mm に戻す事になり、M1938 短小銃についても 6.5mm 口径仕様のタイプが製造されました。尚、アフリカ戦線向けに製造された M1938 短小銃の一部には、ドイツの 7.92mm×57 弾仕様の物も存在しました。



薬室上面にはサヴォイア王家の紋章を示す王冠の他、テルニ工廠を示す刻印が入っています。

Beretta BM59 Mark Ital TA Self-loading Rifle

Beretta BM59 Mark Ital TA
Self-loading Rifle
ベレッタ BM59 Mark Ital TA 自動小銃



全長 1,120mm(870mm)
口径 7.62mm×51
装弾数 20発



イタリアのベレッタ社は第二次世界大戦後、西ヨーロッパ諸国及び自國の武裝の為に主力小銃として配備されていたM1ガーランド小銃のライセンス生産を行いましたが、このM1ガーランドを基に使用弾薬を7.62mm×51 NATO弾とし、全長の短縮化及びセレクティブ・ファイア機能の追加を行ったのがBM59です。当初はイタリア軍に配備されていた既存のM1ガーランドを改造する形で生産が行われましたが、その後はベレッタ社による新規製造に移行しました。銃口部には消炎器と制退器を兼ねた擲弾発射機を取り付けられており、ガス・カットオフ・スイッチ兼用のライフル・グレネード・サイトも装備しています。また、内部部品の切り替えにより射撃機能をセミ・オートマチックのみに限定する機構も備えています。Mark I~IVまで開発されたBM59シリーズの内、山岳部隊用モデルはMark IIIもしくはMark Ital TAと呼ばれ、金属製の折り畳みストックとピストル・グリップを装備しているのが特徴です。



Benelli SPAS 15 Shotgun

Benelli SPAS 15
Shotgun
ベネリ SPAS 15 ショットガン



Benelli SPAS 15
Shotgun
ベネリ SPAS 15
ショットガン

全長 1,000mm(750mm)
口径 12GA
装弾数 3/6/8発



イタリアのルイギ・フランキ社がSPAS 12の後継として1986年に開発したショットガンで、SPAS 12と同様にポンプ・アクションと半自動射撃の切り替えが可能です。半自動システムはショート・ストローク・ピストンのガス圧利用方式で、閉鎖機構はローテイティング・ボルト式となっています。ポンプ・アクション機構を備えているため、催涙弾や非致死性弾薬といった低圧の弾薬を発射する際にも確実に装填を行う事が可能です。ポンプ・アクションと半自動射撃の切り替えは、フォア・エンド上部のボタンを押しながら前後させる事により行います。弾倉はボックス・マガジン式を採用しており、より迅速な弾薬の装填が可能となりました。また、グリップ前面にはグリップ・セーフティが装備されており、安全面も考慮されています。ストックは固定式及びサイド・フォールディング式の2種類のタイプが存在します。SPAS 15は同じベレッタ傘下のベネリ社のブランドでも販売されました。



写真の銃はすべて無可動実銃です。

Sharps Model 1874 Sporting Rifle mfd. by Davide Pedersoli

Sharps Model 1874
Sporting Rifle
mfd. by Davide Pedersoli
シャープス M1874
スポーティング・ライフル
(デビッド・ペデルゾーリ社
復刻品)



全長 1,295mm
口径 .45-120
Sharps Straight
装弾数 単発



シャープス小銃はクリスティアン・シャープス (Christian Sharps) により1840年代に設計された南北戦争時の代表的なライフルの一つです。シャープス小銃は単発ながら耐久性が高く、南北戦争後も金属薬莢を使用するリム・ファイアやセンター・ファイア仕様に改造成されて使用が続けられた他、当初からセンター・ファイア仕様として製造された品も存在します。本品はイタリアのデビッド・ペデルゾーリ社がセンター・ファイアのM1874スポーティング・ライフルを復刻した品で、2000年に同社で生産された特別生産品である事を示す「dp2000」のロゴが入っています。現代の長距離射撃に対応する為、使用弾薬は黒色火薬を使用する大口径の.45-120弾となっており、肉厚のオクタゴン・バレルとダブル・セット・トリガーを装備しています。リア・サイトは銃身上部のラダー・サイトに加えてロング・レンジ・ピーブ・サイトが装備されており、フロント・サイトにはチューブ型のガードが取り付けられています。



Sharps Model 1874 Carbine mfd. by Davide Pedersoli

Sharps Model 1874 Carbine
mfd. by Davide Pedersoli
シャープス M1874 カービン
(デビッド・ペデルゾーリ社
復刻品)



全長 950mm
口径 10.4mm
(410 bore)
装弾数 単発



イタリアのデビッド・ペデルゾーリ社が復刻生産したシャープスM1874カービンです。シャープス小銃は、本体下部のアンダー・レバーを下方に操作する事によりブリーチ・ブロックが垂直に下降して薬室が開放され、弾薬の装填を行います。尚、本体右側面に設けられたハンマーはアンダー・レバーの操作とは連動しておらず、別途ハンマーのコッキング操作を行う必要がありました。シャープス小銃は同時代に同じくバッファロー狩りに用いられたレミントン・ローリング・ブロック小銃に比べて、ブリーチ・ブロック閉鎖途中での暴発事故が発生し難い構造となっていました。オリジナルのシャープス M1874 小銃は.40口径から.50口径までの多種多様な口径のモデルが製造されました。デビッド・ペデルゾーリ社製の復刻モデルは現代の状況を考慮し、使用弾薬を黒色火薬仕様の.410口径散弾としています。その為、銃身下部には「CAL.410」及び「BLACK POWDER ONLY(黒色火薬専用)」の刻印が入っています。



センター・ファイア・モデルのため、ブリーチ・ブロックにはファイアリング・ピン及びエキストラクリークが装備されています。

写真の銃はすべて無可動実銃です。

Berthier Mle 1892 Carbine

Berthier Mle 1892
Carbine
ベルチエ Mle 1892
騎兵銃



全長 945mm
口径 8mm×50R
装弾数 3発



ベルチエ小銃は1890年にフランス軍制式となったボルトアクション・ライフルで、騎兵や砲兵部隊が装備するグラスMle 1874単発騎兵銃を更新する目的で採用されました。ベルチエ小銃はレペルMle 1886小銃の作動機構を改良し、マンリッカ方式のエンブロック・クリップによる装填機構が組み込まれています。尚、レペル小銃ではボルトのロッキング・ラグがレシーバーと水平位置で噛み合う構造でしたが、ベルチエ小銃では垂直位置で噛み合う構造となっています。ベルチエ小銃は当初騎兵銃モデルのみが制式採用され、1900年代に入りてから歩兵銃モデルがフランス植民地軍向けに採用されました。Mle 1892騎兵銃は、Mle 1890騎兵銃の銃身を僅かに延長して着剣装置を追加したモデルです。Mle 1892騎兵銃には、1898年に採用された尖頭弾であるCartouche Modèle 1886 à Balle D弾に対応したリア・サイトに換装されたMle 1892 MDと呼ばれるタイプや、Mle 1916小銃に準じて装弾数を5発に改修したタイプが存在します。



FA-MAS .223 Bullpup Self-loading Rifle



FA-MAS .223
Bullpup Self-loading
Rifle
FA-MAS .223 自動小銃



全長 757mm
口径 5.56mm×45
装弾数 25発



フランス軍用自動小銃であるFA-MAS F1のコマーシャル・モデルで、MAS.223とも呼ばれます。民間向けモデルの為、射撃機能をセミ・オートマチックのみに限定している他、ライフル・グレネードの発射機能も省略した仕様となっています。その為、セレクターや連射機能のコントロール・ユニットが取り外されてレシーバー後部下方にはカバーが嵌め込まれている他、キャリング・ハンドル内のグレネード用サイトも除去されています。本銃はアメリカ市場をターゲットに生産され、1980年代にバーモント州セントオールバンズのセンチュリー・アームズが輸入を行いましたが、極少数が米国に輸出されただけで生産中止となり、総生産数は数百挺程度と言われています。尚、MAS.223は輸出向けモデルで、使用弾薬は.223 レミントン弾ですが、フランス国内の民間市場向けとして.222 レミントン弾仕様のモデルも製造されました。.222 レミントン弾仕様のモデルは銃身長が570mmとなっています。



銃身はライフル・グレネードに対応しておらず、グレネードの射距離調整用の凹凸が省略されています。

Steyr AUG A2

Heavy Barreled Automatic Rifle

Steyr AUG A2
Heavy Barreled Automatic Rifle
ステアー AUG A2 HBAR ライフル



全長 910mm
口径 5.56mm×45
装弾数 30/42発



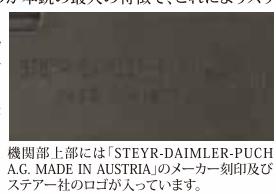
ステアー AUG A2 自動小銃をベースに開発された分隊支援火器モデルで、連続射撃に対応した銃身長621mmのヘビーバレル及び二脚が標準装備されています。ベースとなったステアー AUG はオーストリアのステアーマンリッヒャー社が開発したブルバップ型の自動小銃です。ステアーハンドルに設けられたボタンを押す事によりコッキング・ハンドルとボルト・グループが連結されてボルト・フォワード・アシストとして機能しましたが、1997年に登場したAUG A2ではコッキング・ハンドルを倒す事により機能するよう改良されました。また、スコープ内蔵のキャリング・ハンドルを取り外してピカティニー・レールへの交換が可能となっているのも特徴です。ステアーハンドルと同様にヘビーバレルと二脚を装備するAUG LMGと呼ばれる軽機関銃モデルも存在しますが、ヒヤーのメーカー名及びAUGのモデル名がこちらはオープン・ボルト位置から射撃を行うトリガー・ユニットになっています。

Steyr MPi 69

Sub Machinegun



Steyr MPi 69
Sub Machinegun
ステアーハンドル
全長 670mm(465mm)
口径 9mm×19
装弾数 25/32発



1969年にオーストリアの国境警備隊及び警察が制式採用した短機関銃です。テレスコピング・ボルト方式により全長を短縮している点や、マガジンをグリップ内に収納する点等にUZI短機関銃等からの影響が見られますが、ロア・フレームが一体成型の樹脂製となっており、伸縮式のワイエーストックを備えているのが特徴です。さらにコッキング・ハンドルが前方のスリング・スイベルを兼ねているのが本銃の最大の特徴で、これによりスリングを肩にかけたまま銃を前後させてのコッキング操作が可能です。作動方式はプローバック方式で、オープン・ボルト位置から射撃を開始します。トリガー上部に装備されたマニュアル・セーフティ兼用のセレクター・ボタンを完全に左側に押し込んだ状態では、トリガーを引く量に応じてセミ/フル・オートマチック射撃の切り替えが可能です。ボタンが左右の中間位置にある場合は、セミ・オートマチック射撃のみが可能となります。

Swiss M1864 Field Shooter Rifle



Swiss M1864
Field Shooter Rifle
スイス M1864
前装管打式野戦射手銃



全長 1,259mm
口径 14mm
装弾数 単発

Swiss Prototype Percussion In-line Rifle mfd. by MORAY



Swiss Prototype Percussion
In-line Rifle
mfd. by MORAY
スイス軍用試作
"In-line" 管打式歩兵銃
(ベルギー MORAY社製)



全長 1,340mm
口径 18mm
装弾数 単発

1864年にスイス陸軍制式となった野戦射手銃(猟兵銃)と呼ばれる前装管打式小銃です。スイスでは元猟師や森林官など小銃の扱いに習熟していた猟兵と呼ばれるプロフェッショナル達に精度の良い小銃を支給し、狙撃兵に近い役割を担わせました。彼らは基本的に騎馬で移動し、戦闘の際は下馬して戦いました。その為、野戦射手銃の全長は歩兵銃よりは若干短く、トリガー・ガード後部に指掛けが追加されています。トリガーはダブル・セット・トリガーで、後方のトリガーを引く事により前方のトリガーがセットされます。リア・サイトは右側のツマミを緩めて射距離の調整を行う方式となっています。同時代のドイツ語圏のオーストリア陸軍や帝政ドイツ陸軍にも同様の兵科が存在し、本銃と同じような形態の小銃を装備しました。猟兵は基本的には歩兵のような銃剣突撃を行わない兵科であったため、猟兵銃には着剣装置を装備するモデルと着剣装置の無いモデルが存在します。



19世紀中頃にベルギーリエージュのMORAY社で製作されたと考えられる単発前装管打式歩兵銃です。一般的な管打式小銃とは異なり、本銃では銃身後端にバーカッション・ニップルが位置し、アッパー・タンクのハンマーにより撃発を行う構造となっているのが特徴です。このような構造の銃は英語で "In-line" と呼ばれ、製作工程の簡略化が可能ですが、発射ガスがニップル孔から後方に噴出する危険性を伴います。本銃のハンマーはグリップ・セーフティを握り込んだ状態でのみ落ちる構造となっていますが、撃発後はセーフティを解放しない限りハンマーが前進位置で固定され、銃身後端からの発射ガスの吹き戻しを防いでいます。また、工具を使わずに機関部と銃身を銃床から取り外せるのも特徴の一つです。全体の作りはフランス系のマスケットの流れを汲んでおり、銃床はチロル地方独特のチロリアン・バット・プレートと呼ばれるバット・プレート下部が突き出た形状をしています。



機関部後方のアッパー・タンクにはハンマー及びグリップ・セーフティが設けられています。

写真の銃はすべて無可動実銃です。

Swiss M1817/42/59/67 Milbank-Amsler Conversion Infantry Rifle



1817年にスイス連邦軍が統一歩兵銃として採用したM1817歩兵銃を基に、3度にわたる改良を加えたモデルです。M1817は滑腔銃身に固定照門(リア・サイト)を装備した前装銃で、1842年に条条銃身に換装されてM1817/42となり、更に1859年にはリア・サイトが起倒式の可変照門に改良されてM1817/42/59となりました。その後、アメリカのIsaac Milbankが発明したシステムをスイスのRudolf Amslerが完成させた「ミルバンク・アムスラー・コンバージョン(Milbank-Amsler Conversion)」システムを用いて、1867年にリム・ファイア弾薬を使用する後装单発式に改良を行ったのがM1817/42/59/67です。ブリーチ・ブロックはバドル(ハンドル)を持ち上げる事によりロックが解除され、前部を軸にして上方に開く構造となっています。1867年に多くのスイス軍用前装式小銃がミルバンク・アムスラー・コンバージョンの後装式に改造されましたが、当時のスイスは州(Canton=カントン)単位で小銃を調達していた為、ベースとなった小銃のモデルによって外観に大きな違いが見られます。



Vetterli M1870 Police Carbine



ベテューリ小銃は1869年から1889年にかけてのスイス軍主力小銃です。給弾機構は給弾エレベーターと銃身下部のチューブ型弾倉から成り、レシーバー右側面の給弾孔から給弾を行います。一般的なボルト・アクション機構とは異なり、ベテューリ小銃ではボルト自体は回転せず、ボルト・カラーと呼ばれるチューブ状の部品がボルト・ハンドルと一体になって回転し、ボルト・カラー後部の突起がロッキング・ラグとして機能しました。1870年に採用されたベテューリM1870武装警察騎兵銃は、ジャンダルムリ(Gendarmerie)と呼ばれる武装警察の騎馬部隊用に改良された一種の騎兵銃で、歩兵銃の特徴を備えつつも全長を歩兵銃と騎兵銃の中間サイズとして取り回しを容易にしています。尚、歩兵銃の装弾数が11発であったのに対し、武装警察騎兵銃では銃身長の短縮に伴い7発に減少しています。また、給弾孔カバーや遊底覆を装備するなど、初期のベテューリ小銃の特徴をよく残しています。



Schmidt-Rubin IG11 Infantry Rifle

SIG SG542 Paratrooper Self-loading Rifle

Schmidt-Rubin IG11
Infantry Rifle
シュミット・ルビン IG11
歩兵銃



全長 1,310mm
口径 7.5mm×55.5
装弾数 6発



シュミット・ルビン小銃は、スイス軍のシュミット大佐(銃担当)とルビン大佐(弾薬担当)が共同で開発したストレート・ブル式ボルト・アクション・ライフルです。同じくストレート・ブル方式であるオーストリアのマンリッヒャー方式とは異なり、ボルト・ハンドルを引くとボルト・スリーブ内のボルト部分のみが90度回転する独特の構造になっています。1911年にスイス軍制式となったIG11歩兵銃は、IG89歩兵銃の改良型であるIG89/96歩兵銃のストック下部にスキャント・グリップを追加したIG96/11歩兵銃と外観が似ていますが、IG11歩兵銃ではストックとスキャント・グリップが一体型になっている点で判別可能です。また新型のGP11弾に対応する為、機関部の内部構造にも改良が加えられています。IG11を含むシュミット・ルビン系小銃は、その複雑なストレート・ブル方式が原因でボルトの強度不足が懸念とされ、その解決には後継モデルであるK31小銃の登場を待たねばなりませんでした。付属の鎌剣(切断済合法品)は、銃本体とシリアルNo.がマッチしています。

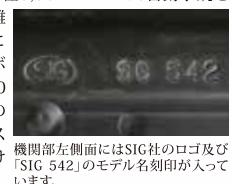


SIG SG542 Paratrooper
Self-loading Rifle
SIG SG542 空挺用
自動小銃



全長 1,000mm(754mm)
口径 7.62mm×51
装弾数 20発

スイスのSIG社で開発された7.62mm×51 NATO弾を使用する自動小銃です。1960年代にSIG社はイタリアのベレッタ社と共に、SG510の遅延プローバックシステムを基に5.56mm×45弾を使用する軽量自動小銃の開発を開始しました。しかしながら、その後作動方式を複雑なガス圧利用のローラー遅延方式へと変更するなどした結果、1968年にベレッタ社は共同開発から離脱して独自に口径5.56mmのAR70自動小銃を開発する事となりました。一方、SIG社が開発したSG530は作動方式が複雑で製造コストも高かった為、成功作とはなりませんでした。その後、1969年にSIG社はよりシンプルで信頼性の高いガス・ピストンとローテイティング・ボルト閉鎖機構を持つSIG SG540シリーズを開発し、口径5.56mmのSG540及び口径7.62mmのSG542が製造されました。尚、SG542の海外向けの製造はフランスのマニューリン社で行われ、ボルトガルやチリでもライセンス生産が行われました。SG542には折り畳みストックの付いた空挺部隊向けモデルも生産されました。



機関部左側面にはSIG社のロゴ及び「SIG 542」のモデル名印が入っています。

B&T APC556 PDW Assault Carbine



B&T APC556 PDW
Assault Carbine
B&T APC556 PDW 自動小銃



全長 725mm(545mm)
口径 5.56mm×45
装弾数 30発



B&T APC (Advanced Police Carbine) は、スイスのB&T社が開発した軍・法執行機関向けのシリーズで、短機関銃から自動小銃まで使用弾薬の異なるモデルが存在します。APC556は5.56mm×45弾を使用する自動小銃モデルで、ショート・ストローク・ピストンによるガス圧利用方式により作動します。本体にはピカティニー・レールが標準装備されており、セレクターやボルト・リリースはいずれもアンビ・タイプ、コッキング・ハンドルも左右で交換可能です。更にハンマー・フォワード・セーフティと呼ばれる安全機能が組み込まれているのも特徴です。銃口部のフラッシュ・ハイダーには、B&T ROTEX II Aサイレンサーを直接装着できます。マガジンは純正のボリマ一製30連マガジンの他、STANAGマガジンも使用可能です。また、ストックには複数のバリエーションが存在し、用途に応じて交換可能です。APC556 PDWは銃身長が280mmのコンパクト・モデルで、NATO加盟国の複数の軍やヨーロッパの警察・情報機関等に採用されています。

Lmg 25 Light Machinegun



Lmg 25 Light Machinegun
Lmg 25 軽機関銃



全長 1,160mm
口径 7.5mm×55.5
装弾数 30発

スイスベルン造兵廠のアドルフ・フューラー大佐が設計し、1925年にスイス軍制式となった軽機関銃です。作動方式は反動利用式で、トグル・ロック方式による閉鎖機構を備えており、射撃時に本体左方向へトグル・ジョイントが飛び出す構造となっています。また、作動時に銃身とボルトが閉鎖機構以外でも機械的に連結されているのが特徴で、銃身とボルト・アッセンブリーを一体として容易に交換可能でした。セミ・フル・オートマチック射撃及び安全位置の切り替えは、マガジン・ハウジング上部のセレクター・レバーにより可能です。本銃は標準装備の二脚及び着脱可能な一脚を使用して軽機関銃として運用された他、専用の三脚や要塞用マウント等に搭載しての運用も可能でした。本銃の生産には高い工業精度が求められ、一挺あたりの生産コストも高かったものの、スイスでは1946年頃まで生産が行わ
マガジン・ハウジング上面にはシリアルNo.に加えてベルン造兵廠製を示す刻印が入っています。



FN Mauser M1930 Short Rifle



Belgium

ベルギーのFN社で生産されたモーゼル系ボルト・アクション・ライフルです。Kar.98k小銃とほぼ同じ全長ですが、ボルト・ハンドルがストレートで、前後スリング・スイベルが下方にある点や、前後バンドを固定するスプリングが2本使用されている点、ハンドガードが薬室前面まで繋がっている点などが異なります。完成度の高いモーゼル式ボルト・アクション機構と取り扱いの容易な短小銃サイズが世界各国の需要にマッチし、大量に輸出されました。尚、FNモーゼルM1924ではフロント・バンド部分までアッパー・ハンドガードが延びた形状でしたが、M1930ではリア・バンドのやや前方までの長さとなっています。また、M1930ではリア・スリング・スイベルの位置がやや後方へと移されています。尚、1937/8年以前に製造されたFNモーゼル短小銃では、機関部左側面の「FAB. NAT. D'ARMES DE GUERRE, HERSTAL-BELGIQUE」の刻印の「DE」部分が大文字となっていましたが、それ以降の生産品では小文字の「de」部分が刻印となっています。

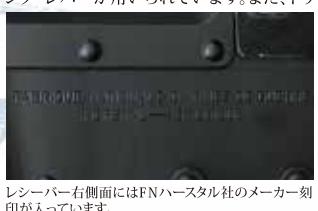
薬室上面にはFN社のロゴが大きく入っています。



FN MAG General Purpose Machinegun



ベルギーのFNハースタル社が1950年代に開発したベルト給弾式の機関銃で、軽機関銃や中機関銃としての運用の他、車両やヘリコプター等に搭載しての運用も可能な汎用機関銃です。閉鎖機構はブローニングBAR自動小銃を参考としており、ボルト・キャリアに連結されたロッキング・レバーが用いられています。また、トリガー・メカニズムやベルト給弾機構はドイツのMG42機関銃を参考としています。レシーバーは鋼板とリベットにより強化されたプレス製で、レシーバー内にはボルト・アッセンブリー用のガイド・レール等がリベットにより固定されています。作動方式はロング・ストローク・ピストンのガス圧利用式で、オープン・ボルト位置から射撃が行われます。射撃機能はフル・オートマチック射撃のみで、グリップ上部にブッシュ・ボタン式のセーフティが装備されています。FN MAGは80か国以上で採用され、英国をはじめ各国でライセンス生産も行われました。



写真の銃はすべて無可動実銃です。

Beaumont-Vitali M1871/88 Infantry Rifle

Beaumont-Vitali
M1871/88
Infantry Rifle
ボーモン・ビタリ
M1871/88 歩兵銃



全長 1,325mm
口径 11.35mm×52R
装弾数 4発



ボーモン小銃はオランダ軍が初めて採用した、当初から金属製薬莢を使用する目的で開発された小銃です。1888年には、単発式のボーモンM1871小銃にイタリアで考案されたビタリ式の固定式4連マガジンを追加して連発式としたボーモン・ビタリM1871/88小銃が採用され、1888年から1890年にかけて約6万挺のボーモンM1871に対して改修が施されました。ボーモン小銃のボルトに使用されるメイン・スプリングには、コイル・スプリングではなく、V字型の松葉バネが用いられています。ボルト・ハンドルは内部にこの松葉バネが組み込まれているため、2つの部品を左右から合わせた構造となっています。この構造はストレート形状のボルト・ハンドルのみに対応しており、騎兵銃など曲がった形状の物には使用出来ませんでした。そのためオランダ軍はボーモン小銃を歩兵用とし、レミントン社からライセンスを受けて生産したローリング・ブロッケ・カービンを騎兵や砲兵用として採用しました。



詳細画像は上の画像4枚とは別個体です。

ArmaLite AR-10 Self-loading Rifle Sudanese Model

ArmaLite AR-10
Self-loading Rifle
Sudanese Model
アーマライト AR-10
自動小銃
スーダン・モデル



全長 1,045mm
口径 7.62mm×51
装弾数 20発



AR-10は米国の大企業ArmaLiteで開発された自動小銃で、米軍では強度不足等の理由で採用されませんでしたが、その後オランダのアーティラリーエンジニアリング(AI)社でライセンス生産が行われました。スーダンへの輸出用として製造されたスーダン・モデルはキューバ輸出向けモデルの発展型で、銃身前部に追加されたバレル・シュラウド下部に着剣ラグが装備されていました。また、フラッシュ・サプレッサーにはネジが切られており、小銃擲弾及び空砲用アダプターの装着が可能となっています。フロント及びリア・サイトには夜光物質がペイントされており、リア・サイトのダイヤル表示はインド数字表記となっています。尚初期ロットのスーダン・モデルのストックには部隊識別用の真鍮製ディスクが取り付けられていた他、砂漠や森林でのカモフラージュ性能が高い濃緑色のペイントを施したハンドガードやストック、グリップがDynamit A.G.により少数試作製造されました。



写真的銃はすべて無可動実銃です。

CETME C Self-loading Rifle

CETME C
Self-loading Rifle
セトメC 自動小銃



全長 1,015mm
口径 7.62mm×19
装弾数 20発



1960年代に生産が開始され、スペイン全軍や国家憲兵で採用されていた自動小銃です。第二次世界大戦後、スペイン政府は兵器研究機関であるCETMEを組織し、本国で職を失った多くのドイツ人兵器技術者に職を提供しました。大戦中にモーゼル社でStG45自動小銃の設計に携わっていたルートヴィヒ・フォルグリムラー博士は、CETMEでStG45の原案を発展させてセトメAを完成させ、その後セトメAを基に使用弾薬変更や小銃擲弾発射機能の追加等の改良を施したセトメBが1958年にスペイン軍制式となりました。セトメ自動小銃は、ローラー遅延ブローバック機構や外観的特徴が西ドイツのGew.3自動小銃に受け継がれて直接の原型となりました。開発国のスペインではセトメBをベースに7.62mm NATO弾を使用できるよう再設計すると共に、ハンドガードやグリップなど細部に改良を施したセトメCが1960年代に開発され、スペイン全軍において後継のセトメLに更新されるまで第一線で配備されていました。



CETME L Assault Rifle

CETME L
Assault Rifle
セトメL 自動小銃



全長 930mm
口径 5.56mm×45
装弾数 30発



1984年にスペイン軍が採用したセトメ・シリーズの最終型で、使用弾薬が5.56mm NATO弾へと変更されました。作動方式は従来モデルと同様のローラー遅延ブローバック方式ですが、5.56mm弾の特性に合わせて内部品が見直されています。また、トリガー・メカニズムは独立したハウジングに收められ、レシーバー下部がこれを保持する構造へと変更されています。初期型のセトメLではセミ/フルオートマチック射撃の他にバースト射撃機能も内蔵していましたが、後期型では一般的なセミ/フルオートマチック射撃の切り替えへと変更されました。リア・サイト・ユニットの右側面にはボルト・アッセンブリーを後退させた状態で固定するボルト・ホールド・オープン・ボタンが装備されています。セトメL及びリトラクタブル・ストックを備えた短銃身モデルであるセトメLCは1991年まで生産され、その後スペイン軍がG36自動小銃を採用した事に伴い1999年に全軍から退役しました。



写真の銃はすべて無可動実銃です。

Danish Snider M1848/65 Infantry Rifle

Danish Snider
M1848/65
Infantry Rifle
デンマーク スナイダー
M1848/65 後装式歩兵銃



全長 1,310mm
口径 17.5mm×28R
装弾数 単発



デンマーク軍制式のM1848前装式小銃をベースに、スナイダー方式の後装システムを用いて後装式に改修を行ったモデルです。M1848小銃の銃身後部（薬室）の上部を切除した後、右方向に開く蝶番式ブリーチ・ブロックを追加しています。ブリーチ・ブロックには撃針が組み込まれており、M1848小銃から流用されたサイド・ロック式の撃鉄で撃発を行います。この改修はコペンハーゲン造兵廠で1866年から1868年にかけて行われました。デンマークではM1867ローリング・ブロック小銃の採用後も軍への配備が遅れた事から、既存の前装式小銃をスナイダー方式に改修して引き続き運用しました。M1848小銃をベースに改修された後装式小銃としては、3バンドのM1848/65歩兵銃の他、デンマーク海軍向けにM1848小銃から改修されたM1853海軍用小銃を基にスナイダー方式へと改修したM1853/66海軍用小銃が存在します。歩兵銃と海軍用小銃共に、特徴的なアーチ状のダルホフ（Dahlhoff）・タイプのリア・サイトが取り付けられています。

ブリーチ・ブロックはハンドル部分を押し込む事によりロックが解除され、開閉が可能となります。

Krag-Jørgensen M1889/24 Artillery Rifle

Krag-Jørgensen
M1889/24
Artillery Rifle
クラグ・ヨルゲンセン
M1889/24 砲兵銃



全長 1,105mm
口径 8mm×58R
装弾数 5発



ノルウェーのOle H. J. KragとErik Jørgensenが開発した特殊な装填機構を持つボルト・アクション・ライフルで、弾薬の装填はレシーバー右側面にあるハッチを開いて一発ずつ行います。デンマーク軍用モデルはドイツのGew.88小銃と同様、銃身にバレル・ジャケットを装備し、フローティング・バレルとする事で命中精度の向上を図っていました。デンマークでは最初にM1889小銃が採用された後、これを基に複数のバリエーションが開発され、1924年にはM1889/10歩兵銃を縮短したM1889/24砲兵銃が採用されました。基本的な仕様はM1889/23騎兵銃と同様ですが、銃口付近に着剣装置を下部に備えたキャップが追加されている他、銃床の一部に木部の埋木が行われているなど、歩兵銃の名残が見られます。騎兵銃と同様、スリング・スイベルは左側面にも設けられ、ボルト・ハンドルは下方に曲げられています。デンマークは1940年にドイツ軍占領下に置かれるまでクラグ・ヨルゲンセン小銃を第一線で使用しました。



弾薬の装填は本体右側の大型ハッチを開いて一発ずつ行います。装填操作はボルトが閉鎖状態でも可能です。

Mauser CG80 Match-Target Rifle

Mauser CG80
Match-Target Rifle
モーゼル CG80
マッチ・ターゲット



全長 1,251mm
口径 6.5mm×55
装弾数 5発



スウェーデン軍制式小銃であったモーゼル M1896 系の機関部を用いて開発された競射競技専用銃です。一連のシリーズとして CG63、CG73、CG80 が開発され、スウェーデン軍及び FSR と呼ばれる射撃競技団体で使用されました。CG63 は 1963 年にモーゼル M1896 小銃をベースに、新造されたフリー・フローティング のヘビー・バレルとセミ・ピストル・グリップ付のストック、そしてマイクロ・スター・サイト を装備してカール・ゲスタフ工廠及びノルマ社で製造されました。CG63 ではロック・タイム短縮の為、コッキング・ピースの軽量化及び作動ストロークの短縮化が行われています。1973 年にはストックを改良したモデルが CG73 として使用されました。CG63 との差異は僅かであったため軍では区別されませんでした。その後、1980 年には重量を更に増したヘビー・バレル の他、調整可能なチーク・ピースを備えたストックや、CG63 に比べてより精密なマイクロ・スター・サイト を装備した CG80 が採用されました。



Ljungman Ag m/42B Self-loading Rifle

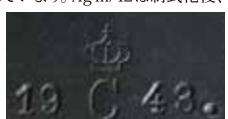
Ljungman Ag m/42B
Self-loading Rifle
リュングマン Ag m/42B
自動小銃



全長 1,217mm
口径 6.5mm×55
装弾数 10発



スウェーデンの Erik Eklund が設計し、1942 年に制式化された Ag m/42 自動小銃の改良型です。Ag m/42 の作動方式は、ガス・チューブを通して発射ガスを直接ボルト・キャリアに吹き付けて後退させる当時としては斬新なダイレクト・インピングメント式で、この構造は「リュングマン式」としても知られています。Ag m/42 は制式化後、ガス・チューブの腐食など幾つかの問題点が指摘され、1953 年から 1956 年にかけて既存の Agm/42 に改修を加えたモデルが Ag m/42B として新たに制式化されました。Ag m/42B ではガス・チューブがステンレス製に変更された他、リア・サイトやマガジン、クリーニング・ロッド等にも改良が加えられました。Ag m/42B はデンマークやエジプトでも採用され、エジプトでは 1950 年代初頭に製造ライセンスを取得し、7.92mm×57 モーゼル弾を使用するモデルがハキム自動小銃の名で軍に採用されました。尚、スウェーデンでは 1960 年代半ばに AK4 自動小銃により更新されるまで使用されました。



写真の銃はすべて無可動実銃です。

Soviet Union

Mosin Nagant M1938 Carbine

Mosin Nagant M1938 Carbine
モシンナガン M1938 騎兵銃



全長 1,016mm
口径 7.62mm × 54R
装弾数 5発



モシンナガンM1891/30歩兵銃を基に設計された騎兵銃モデルで、主に砲兵部隊や後方部隊等に配備されました。M1891/30歩兵銃に比べて銃身や銃床前部、ハンドガードが短縮化された他、着剣機能が省略されています。銃身の短縮に伴いクリーニング・ロッドも短縮された他、リア・サイトの最大射程についてもM1891/30歩兵銃の2,000mに対してM1938騎兵銃では1,000mへと変更されています。また、M1891/30歩兵銃では銃身にフロント・サイト・ベースがろう接によって直接取り付けられていたが、M1938騎兵銃ではスリーブ状のフロント・サイト・ベースを銃身に圧入した後、ピンにより側面から固定する構造へと変更されています。M1938騎兵銃は1939年から1945年にかけて主にイジェフスク造兵廠で製造された他、ツーラ造兵廠でも1940年と1944年に製造が行われました。1944年に側面折り畳み式のスパイク銃剣を備えたモシンナガンM1944騎兵銃が導入されると、M1944騎兵銃と同型の銃床を取り付けたM1938騎兵銃も製造されました。

本個体の薬室上面にはイエフスク造兵廠を示す刻印の他、1944年製を示す刻印が入っています。

Tokarev SVT 1940 Self-loading Rifle w/ PU Scope

Tokarev SVT 1940 Self-loading Rifle w/ PU Scope トカラフ SVT 1940 自動小銃 (PUスコープ付)



全長 1,217mm
口径 7.62mm × 54R
装弾数 10発



フョードル・トカラフ技師が設計したSVT 1938の改良型で、1940年に旧ソ連軍制式となった半自動小銃です。作動方式はショット・ストローク・ピストンによるガス圧利用式で、ティルティング・ボルト方式の閉鎖機構を備えています。弾薬の装填はマガジン交換の他、モシンナガン小銃用の5発クリップを用いて本体上部から行う事も可能でした。本銃は使用弾薬の性能や給弾不良等の問題を抱えていた他、モシンナガン小銃に比べて製造コストが高く、更に初步的な訓練を受けただけの兵士にとっては構造が複雑でメンテナンスが難しい銃でした。そのため徐々に生産数が減られ、1945年初頭には生産が終了しました。SVTには狙撃銃として使用するため、PUスコープを装着出来るバリエーションも製造されました。またバリエーションとしてフル・オートマチック射撃が可能なセレクティブ・ファイアのAVTが存在しましたが、耐久性等に問題があったため少數の生産に留まりました。



約5万挺生産されたSVTの狙撃銃モデルでは、レシーバーにPUスコープ・マウントを装着する事ができます。

写真の銃はすべて無可動実銃です。

Soviet Union

AKM Assault Rifle

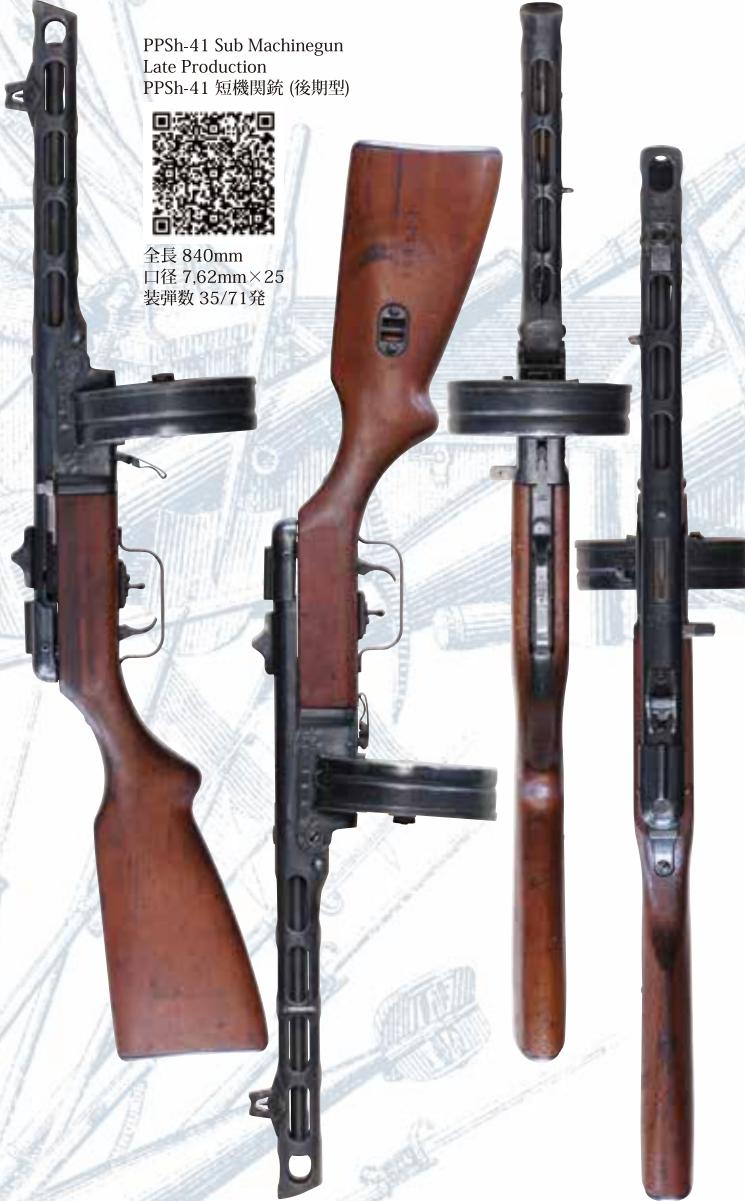


ミハエル・カラシニコフが設計したAK-47自動小銃の改良型で、1959年に旧ソ連軍により制式採用されました。基本構造はAK-47と同様ですが、レシーバーが削り出しからプレス製へと変更になり、生産性の向上と軽量化が図られています。フレームオートマチック射撃時の制御を容易にするため、ストックの形状も直銃床型へと変更された他、銃口部には斜めに切り落とされた形状のマズル・ブレーキが追加されたのも特徴です。また、トリガー機構にはボルトが完全に閉鎖するまでハンマー・リリースのタイミングを遅延させるための部品が追加されました。尚、リア・サイトの最大射程はAK-47では800mまでとなっていましたが、AKMでは1,000mまで延長されています。マガジン・ウェル上方のレシーバー両側面には本体強度の向上及びマガジンを正常な位置に固定する事を目的とした窪みが設けられています。AKM自動小銃は、旧東側諸国を始めとする諸外国でもライセンス生産が行われました。

リア・サイトの最大射程は1,000mまでとなっています。



PPSh-41 Sub Machinegun Late Production



第二次世界大戦中にソ連軍が使用した代表的な短機関銃で、大戦中600万挺以上が生産されたと言われています。本銃は71連ドラム・マガジン装着時の外観から、通称「バラライカ」または「マンドリン」と呼ばれた他、開発者の名前から「シュバーゲン」とも呼ばれました。作動方式はシンプルなプローパック方式で、オープン・ボルト位置から射撃を行います。トリガー・ガード内にはセレクターが設けられており、セミ/フル・オートマチック射撃の切り替えも可能となっています。銃身前方まで延長されたバレル・ジャケットはマズル・ブレーキやコンベンセーターとして機能します。尚、71連ドラム・マガジンに加えて、1942年に開発された35連パナナ・マガジンも装着可能です。PPSh-41は製造時期により細部に改良が加えられ、後期生産品ではリア・サイトがガードの付いたフリップ式となり、マガジン取り付け部上部のロア・フレーム両面に強化タブが追加されました。

排莢孔は本体上面に設けられており、排莢孔後方にはシリアルNo.が打刻されています。



写真の銃はすべて無可動実銃です。

Soviet Union

DP Light Machinegun

DP Light Machinegun
DP 軽機関銃



全長 1,290mm
口径 7.62mm×54R
装弾数 47発



SGM Heavy Machinegun

SGM
Heavy Machinegun
SGM 重機関銃



全長 1,120mm
口径 7.62mm×54R
装弾数 ベルト給弾



ヴァシーリー・デグチャレフが設計し、1928年からソ連軍への配備が始まった軽機関銃です。使用弾薬である7.62mm×54R弾はリムド・カートリッジのため、マガジンは強いアーチを描く形状となりますが、その延長として生まれた円盤型の47連パシ・マガジンが本銃の最大の特徴です。作動方式はロング・ストローク・ピストンのガス圧利用式で、ボルト両側に設けられたロッキング・フラップによる閉鎖機構を備えており、オープン・ボルト位置から射撃を行います。DPのリコイル・スプリングは銃身下部のガス・ピストン周囲に配置されていましたが、これは長時間の射撃によるリコイル・スプリングの過熱と、それに伴うスプリングの変形や反発力低下を引き起こしました。この問題を解決するため、改良型のDPM軽機関銃ではリコイル・スプリングの配置が見直され、レシーバー後方へと移されました。DPにはバリエーションとして他にも航空機関銃のDAや車載型のDT等が作られました。

リア・サイト・ガードはマガジン・リリースを兼ねており、後方に引く事でマガジンの取り外しが可能です。

旧ソ連で第二次世界大戦中に制式となったSG-43重機関銃を基に改良を行ったモデルです。SGMでは銃身の軽量化と冷却性能向上を目的としてバレル・フルートが追加された他、コッキング・ハンドルの位置がレシーバーの右側へと変更されました。また、銃身のロッキング・ウェッジによる固定方法にも改良が見られます。作動方式はSG-43と同様にロング・ストローク・ピストンのガス圧利用式で、ボルトがレシーバーの内壁に対して嵌まり込んでロックされる閉鎖機構も引き継がれています。車輪の付いた銃架はSG-43用と同様に対空用としても使用可能ですが、運搬時に折り畳みが可能な構造の改良型も用いられました。SGM重機関銃にはバリエーションとして電磁(ソノイド)式トリガーを装備し車載用の同軸機関銃に特化させたSGMTや、装甲車両の車外取り付け用マウントに搭載されるSGMBが存在します。尚、SGMは旧ソ連の他、エジプトや中国でもライセンス生産が行われました。



SG-43でスピード・グリップ下部に設けられていたコッキング・ハンドルは、SGMではレシーバー右側へと移されました。

写真の銃はすべて無可動実物です。

Vz.26 Sub Machinegun

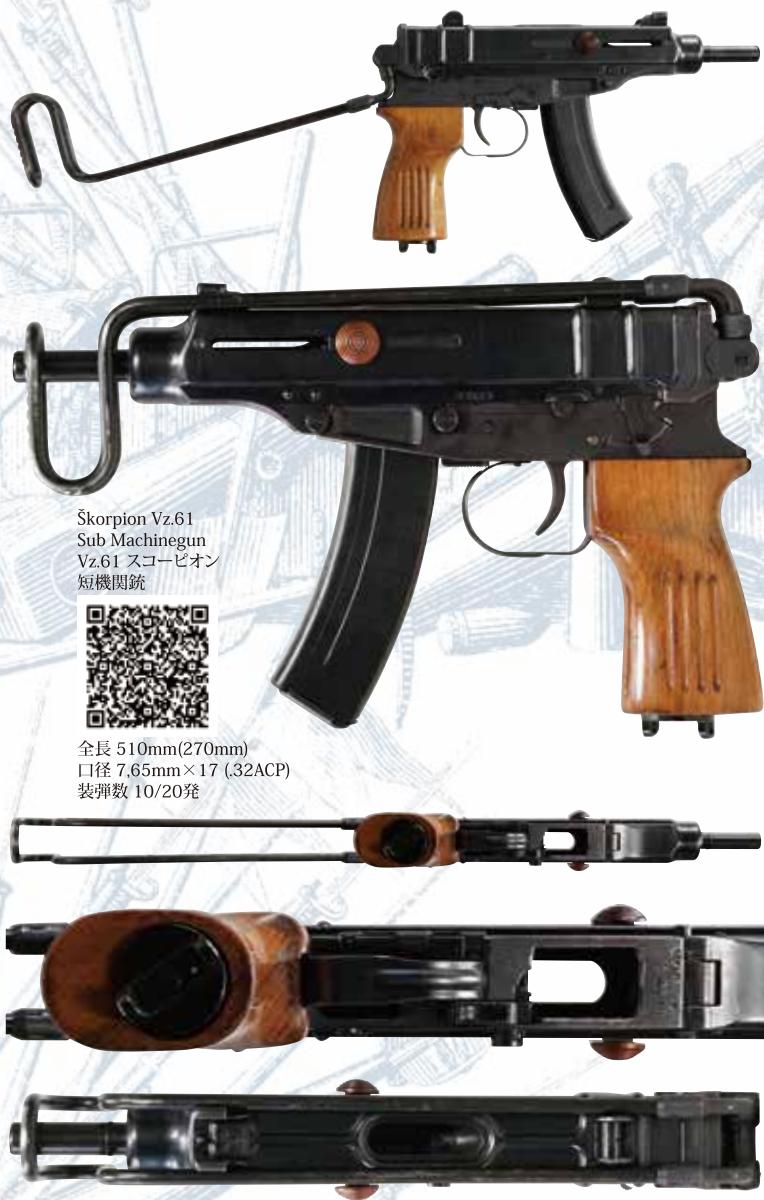
Czechoslovakia



チェコスロバキアのチェスカ・ズブロヨフカ・ウヘルスキ・ブロドで開発されたSa Vz.23シリーズの一つです。Sa Vz.23シリーズは、銃身をボルトの前半部で包み込むように配置する事で全長をコンパクトに抑えられるテレスコピング・ボルト方式を量産品としては世界で初めて採用し、イスラエルのUZI短機関銃の設計にも影響を与えた。本銃には独立したセレクターは装備されていませんが、2段引きのトリガーによってセミ/フル・オートマチック射撃の切り替えが可能となっています。Sa Vz.23シリーズは元々9mm×19弾の使用を前提とし、固定ストック付モデルがVz.48a、折り畳みストック付モデルがVz.48bとして採用されました。しかし、1950年代にソ連からの圧力により使用弾薬の7.62mm×25弾への変更を余儀なくされると、急速に7.62mm×25弾仕様への再設計が行われました。これにより、それまでのVz.48aをVz.23、Vz.48bをVz.25と改称し、新たに7.62mm×25弾仕様のモデルがVz.24（固定ストック）、Vz.26（折り畳みストック）として採用されました。

リア・サイトを回転させる事で、至近距離から400mまで照準を調節する事ができます。

Škorpion Vz.61 Sub Machinegun



1950年代末に開発され1961年にチェコスロバキア軍制式となった非常にコンパクトな短機関銃です。主に車両搭乗員や通信兵等の自衛用火器として使用され、小型でありながら短時間に多数の弾薬を発射し弾幕を張る目的で設計されています。その名の通りワイヤー・ストックをサソリの尻尾のように本体上部に折り畳む独特の方式である事や、グリップ内に発射速度を調整するレート・リデューサーが内蔵されている点など、外観と内部構造のいずれも特徴的な銃です。このレート・リデューサーにより、コンパクトなサイズながら発射速度が約850発/分にまで抑えられています。Vz.61短機関銃はチェコの輸出公社オムニポールから世界各国へ輸出された他、ユーゴスラビアではM84短機関銃としてライセンス生産も行われました。尚、本銃を含む戦後のチェコ製軍用銃の多くが当初はブルー仕上げで製造されていましたが、その後チェコ独特のグレーの焼付塗装へと変更されました。



写真の銃はすべて無可動実銃です。

Kbk-g wz.60 Assault Rifle

Kbk-g wz.60 Assault Rifle
Kbk-g wz.60 自動小銃



全長 1,090mm(873mm)
口径 7.62mm×39
装弾数 10/30発



ポーランドが自国でライセンス生産したAK-47自動小銃をベースに、小銃擲弾の発射能力を付与したモデルです。基本構造はAK-47と同様ですが、銃口部に装着可能なソケット式の擲弾発射器に加えて、小銃擲弾の発射に対応した改良が各部に見られます。ガス・ブロックにはガス・カットオフ機能が追加されており、空砲を使用した擲弾発射時にガス・シリンドーへの発射ガスの流入を遮断出来るようになっています。また、擲弾発射時の衝撃を緩和する為のラバー・パッドが銃床に装着可能となっています。他、レシーバー・カバーが衝撃で外れないようリコイル・スプリング・ガイド後端にスライド式のロックが追加されています。小銃擲弾用の照準器は、初期タイプではリア・サイト基部に取り付けられましたが、その後フロント・サイト・ベースへ装着するタイプに改良されました。本銃の改良型として、破損し易い銃床を容易に交換可能としたKbk-g wz.60/72と呼ばれるモデルも生産されました。



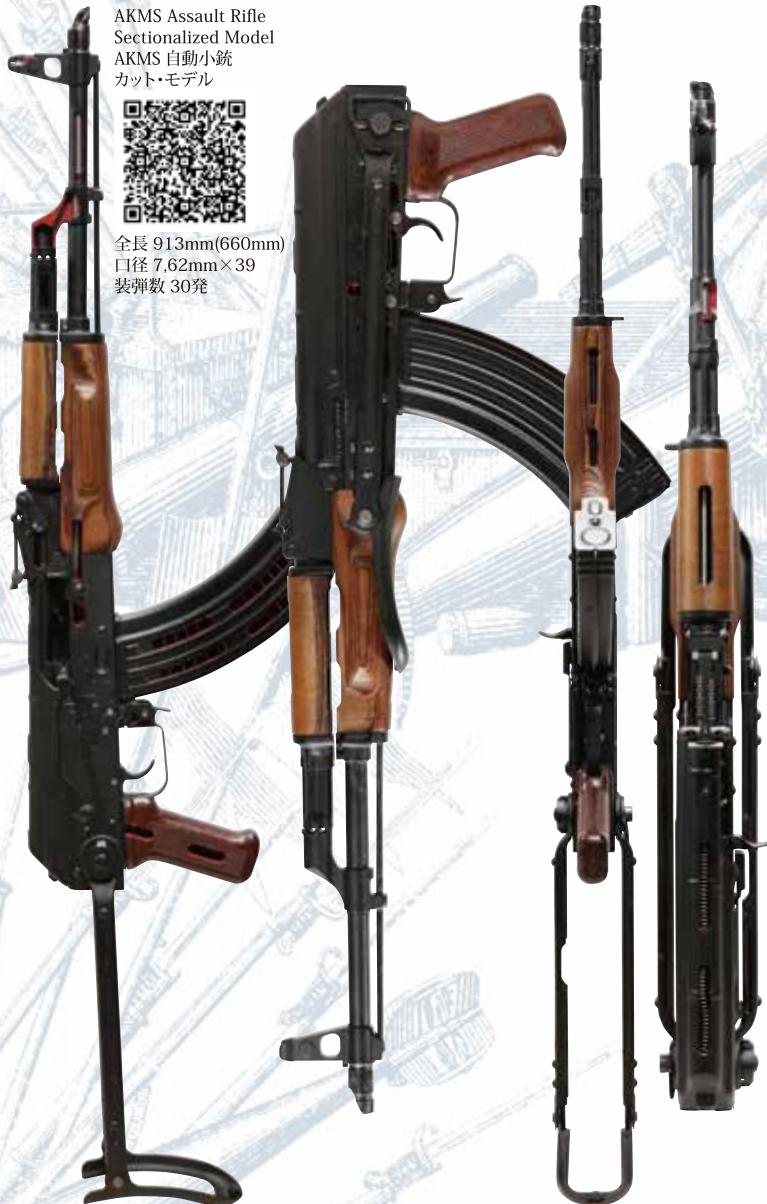
小銃擲弾用の照準器は異なる種類の擲弾に対応しており、スライダーにより距離調整が可能です。

AKMS Assault Rifle Sectionalized Model

AKMS Assault Rifle
Sectionalized Model
AKMS 自動小銃
カット・モデル



全長 913mm(660mm)
口径 7.62mm×39
装弾数 30発



ポーランドでライセンス生産されたAKMS自動小銃で、ポーランドにおける制式名はKbk AKMSです。基本的な仕様はソ連製AKMSと同様で、レシーバーはプレス製となっており、本体下方に折り畳み可能なプレス製フォールディング・ストックを備えています。尚、ソ連製と異なり、セレクターの表示が「C(連射)」及び「P(単射)」のアルファベット表記となっている他、リア・サイトの最短戦闘距離は「S」と表記されています。Kbk AKMSの内、本体側面に暗視照準器を装着するためのマウント・レールを装備したタイプはKbk AKMSNと呼ばれます。ポーランドでは固定ストック仕様であるKbk AKM自動小銃(AKM自動小銃のライセンス生産品)の製造を1980年代に終了しましたが、折り畳みストック仕様であるKbk AKMSの製造はKbk wz.1988 タンタル自動小銃に更新される1992年頃まで続けられました。本品は内部構造が分かるように本体の一部をカットしたモデルで、欧米ではセクションライズド・モデルと呼ばれます。



本体左側面には製造年印記に加えて、楕円形の中に数字の11番が入ったポーランドラドムのWaltera造兵廠を示す刻印が入っています。

AMP-69 Assault Rifle

AMP-69 Assault Rifle
AMP-69 自動小銃



全長 921mm(637mm)
口径 7.62mm×39
装弾数 10/20/30発



ハンガリー軍の将校用自動小銃として開発されたAMP-65をベースに、ライフル・グレネードの発射機能を追加したモデルです。本銃以外のAK系自動小銃にも銃口部にアタッチメントを装着してライフル・グレネードを発射可能なモデルは存在しますが、小型軽量なAKでは発射時のリコイルが非常に強く、実用的とは言えませんでした。そこでハンガリー軍特殊部隊からの要望で、グレネード・ランチャーとしての機能を優先させつつ、自動小銃としての性能も維持出来るモデルとして1969年に開発されたのがAMP-69です。発射時のリコイルを軽減する為、折り畳み式スティックにショック・アブソーバーが組み込まれている他、ハンドガードはスプリングにより前後に可動し、グレネード発射時に添え手が弾かれる事を防いでいます。更にガス・カットオフ・スイッチの追加や、グレネード発射時の衝撃によりレーサー・バーが外れないようロック機能が装備されているのも特徴です。



本体左側面のレールにはグレネード用の光学照準器を装着する事が可能となっています。

31M Light Machinegun

31M Light Machinegun
31M 軽機関銃



全長 1,175mm
口径 8mm×56R
装弾数 25発



戦間期にドイツのラインメタル社で設計されたMG30軽機関銃をハンガリー軍が採用したモデルです。当時ドイツはヴェルサイユ条約により機関銃の製造を禁止されていたため、部品供給はオーストリアのステアー社、最終的な組み立てはスイスのソロターン社で行なわれました。給弾方式も同条約による制限のため、ベルト給弾ではなく箱型弾倉となっています。作動方式はショット・リコイルの反動利用式で、上下二段式のトリガーによりセミ/フル・オートマチック射撃の切り替えが可能でした。1930年にオーストリアがMG30と同型のM30Sを制式とし、翌年の1931年にハンガリーも31Mを採用しました。M30Sと31Mは基本的に同型ですが、31Mではハンド・ジャケット基部に前方に傾斜した形状のグリップが追加されています。またトリガーのセレクター表示や安全装置の表記が異なっている他、三脚の長さや固定方法も異なります。ハンガリー仕様の31Mの生産数は僅か2,000～3,000挺程と言われています。



ハンド・ジャケット基部には前方に傾斜した形状のグリップが追加されています。

写真的銃はすべて無可動実銃です。

Zastava M77B1 Self-loading Rifle

Zastava M92 Assault Carbine

Zastava M77B1
Self-loading Rifle
ツアスター M77B1
自動小銃



全長 1,250mm
口径 7.62mm×51
装弾数 20発



ユーゴスラビアのツアスターがM70自動小銃を発展させて設計した自動小銃です。安価で高い信頼性を備えたAK系自動小銃の基本構造はそのままに、西側諸国で一般的な7.62mm×51 NATO弾を使用するモデルとして開発されました。使用弾薬の変更に伴いレシーバーが大型化されている他、銃口部にバード・ケージ・タイプのフラッシュ・ハイダーが装備されているのが特徴です。M77B1では木製の固定ストックが装備されていましたが、折り畳み式ストックが装備されたM77AB1と呼ばれるモデルも製造されました。また、M77B1のレシーバーには削り出し製とプレス製の二種類が存在します。M77B1はユーゴスラビア軍で使用されていた他、キプロスやマリ等でも採用されました。M77シリーズには自動小銃であるM77B1の他、分隊支援火器に位置づけられるM77軽機関銃も存在し、ユーゴスラビアが崩壊してセルビアとなってからもM70や5.56mm×45弾を使用するM21シリーズと並行して若干の改良を重ねながら生産が続けられました。

画像の個体は削り出しレシーバー・モデルで、機関部左側面にはツアスターのメーカー刻印及びロゴが入っています。



Zastava M92
Assault Carbine
ツアスター M92
自動小銃



全長 795mm(550mm)
口径 7.62mm×39
装弾数 30発

ツアスター M70に始まる、ユーゴスラビアで独自に改良されたAKバリエーションの一つです。M92はソ連のAKS-74uのコンセプトに近いショート・カービン・モデルですが、使用弾薬は従来のM70と同様に7.62mm×39弾となっています。また、側面の冷却孔が3本設けられた長めの木製ハンドガードや、M70シリーズと共通の樹脂製グリップなど外観的にもユーゴ独自のものとなっており、ストックについてもAKS-74uのような側面折り畳みタイプではなく、AKMSと同様の下方折り畳みタイプとなっています。また、セレクター・レバーにはボルトを後退位置で固定するための切り欠きが設けられている他、M70シリーズと同様にフロント及びリア・サイトには夜間用サイトが組み込まれているのも特徴です。フラッシュ・ハイダーはAKS-74uと同様、マズル・ブースターとして機能するガス拡散室を備えたタイプが装備されています。尚、ツアスターではM92と類似のデザインで5.56mm×45弾を使用するM85も製造されました。

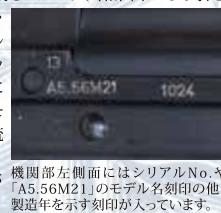


ハンド・ガード側面の冷却孔は3本設けられています。

Zastava M21 Assault Rifle, Short Barrel



1997年に旧ユーゴスラビア連邦共和国では、新型自動小銃の使用弾薬を従来の7.62mm×39弾から西側諸国で一般的な5.56mm×45弾へ更新する事が決定し、この5.56mm弾を使用する自動小銃の開発が開始されました。M21と呼ばれるこの新型小銃は、2004年にユーゴスラビアから改組したセルビア・モンテネグロ軍へ配備が開始され、その後もセルビア共和国軍により引き続き運用されています。ハンドガードやサイド・フォールディング・ストックにはボリマー素材が使用されており、イスラエルのガリル自動小銃と同様に、レシーバー右側面のセレクターに加えて、グリップを握った状態でも親指で操作可能なセレクターが本体左側面に装備されているのが特徴です。M21はスタンダードな銃身長のモデルがM21S自動小銃、ロング・バレル・モデルがM21A自動小銃と呼ばれる他、短銃身のコンパクト・モデルがM21短機関銃としてラインナップされており、現在もツアスター社により生産と輸出が続けられています。



M49/57 Sub Machinegun



第二次世界大戦後、ユーゴスラビアでは国産短機関銃の独自開発が進められ、1949年にM49と呼ばれるモデルが開発されてクラグイェヴァツ(Kragujevac)のツアスターで製造が開始されました。M49短機関銃の外観は旧ソ連のPPSh-41短機関銃に類似しており、弾倉も互換性が有りましたが、円筒形一体型の機関部やバッファー、左側に開いたエジェクション・ポート等にはイタリアのベレッタM1938系短機関銃の影響を受けしていました。また、銃床下部にはクロス・ボルト・セーフティが追加されているのも特徴です。さらにフロント・サイトにはドイツのKar.98k小銃に類似したU字型の保護カバーが装備されている他、円形のコッキング・ハンドル形状など特徴の多い短機関銃でした。M49/57短機関銃はM49に小改良を加えたモデルで、複雑なボルト・ユニットが一般的なボルトとリコイル・スプリングの組み合わせへと簡略化されました。M49/57は、後継のM56短機関銃が登場した後も一定数の製造が続けられました。



IWI X95 Bullpup Assault Carbine

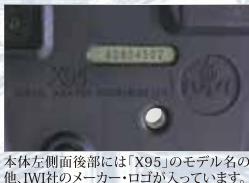
IWI X95
Bullpup Assault Carbine
IWI X95 自動小銃



全長 580mm
口径 5.56mm×45
装弾数 30発



イスラエル・ウェポン・インダストリーズ (IWI) により開発された、コンパクトなサイズのアサルト・カービンです。当初はタボールTAR-21自動小銃のバリエーションとして、マイクロ・タボールの名称で販売されました。現在ではX95として従来のタボール・シリーズから独立した派生モデル扱いとされています。作動方式はTAR-21と同様にロング・ストローク・ピストンのガス圧利用式で、ローテイティング・ボルト式の閉鎖機構を備えています。グリップ上部に設けられたセレクター・レバーはアンビ・タイプとなっており、コッキング・ハンドルや排莢の方向も使用者の好みに応じて左右で変更する事ができます。また、フレック式でありながらトリガー・ガード上部の両面にマガジン・リース・ボタンが設けられているのも特徴です。X95は9mm×19弾仕様の短機関銃モデルなど口径の異なるバリエーション展開も行われており、9mmモデルでは作動方式がブローバック方式となっています。



本体左側面後部には「X95」のモデル名の他、IWI社のメーカー・ロゴが入っています。

UZI Sub Machinegun



UZI Sub Machinegun
UZI 短機関銃

全長 655mm(470mm)
口径 9mm×19
装弾数 20/25/32発

建国後間もないイスラエルで開発され、戦後第一世代の短機関銃としては最も成功したモデルです。本銃はその瞬発的な火力と取り回しの良さから、イスラエル国防軍内の幅広い職種で採用され、1980年代頃まで第一線で活躍しました。作動方式は古典的なオープン・ボルトの反動利用式ですが、銃身をボルトの前半部で包み込むように配置するテレスコーピング・ボルト方式を採用しており、マガジンをグリップ内に収納する事により、従来の短機関銃と比べてコンパクトな全長を実現しています。また、ボルトの重心が前方へ移動した事により、連射時の銃口の跳ね上がりも抑えられています。この基本設計は、1948年にチェコで開発されたSa.23短機関銃シリーズから借用した物でしたが、西側諸国でSa.23シリーズの知名度が全く無かった事も幸いし、それまでに革新的な短機関銃として世界各国の軍・法執行機関の関心を惹き、派生モデルも含めて90ヶ国以上に輸出されました。



写真の銃はすべて無可動実銃です。

Type 43 Sub Machinegun

Type 43 Sub Machinegun
四三式 短機関銃



全長 820mm(615mm)
口径 7.62mm×25
装弾数 35発



中華人民共和国でライセンス生産されたPPS-43短機関銃で、制式年から54式（1954年式）とも呼ばれます。オリジナルのPPS-43は、PPSh-41短機関銃を基にレシーバーにプレス工法を取り入れる事で軽量化及び省力化が図られており、ロシア製短機関銃としては初めて折り畳み式ストックが採用されました。戦後ソ連から中国に供与されたPPS-43は、その性能や量産性が高く評価され、1953年より中国国内の造兵廠において国産化が行われました。四三式短機関銃の基本構造やスペックはオリジナルのソ連製とほぼ同一であり、刻印以外に違いを見出す事は困難ですが、一部の個体ではグリップ中央に「K」の文字が入った品が見られます。四三式短機関銃は人民解放軍において偵察兵や後方部隊用として運用された他、民兵用装備としても長く使用されました。また、国外へも共産援助品として多数が輸出されており、特にベトナム戦争において北ベトナム軍や南ベトナム解放民族戦線が大規模に使用しました。



Type 69-I Rocket Launcher

Type 69-I Rocket Launcher



Type 69-I Rocket Launcher
69-I式 ロケット・ランチャー



全長 910mm
口径 40mm
装弾数 単発

中華人民共和国がRPG-7をリバース・エンジニアリングによりコピー生産した69式ロケット・ランチャーを基に独自の改良を加えたモデルで、1980年代半ばにノリコ社（中国北方工業公司）により開発されました。69-I式にはオリジナルのソ連製RPG-7には見られないキャリング・ハンドルや二脚が追加されている他、ヒート・ガードやグリップ、キャリング・ハンドルが木製から断熱性に優れた赤茶色の複合樹脂製へと変更されています。また、砲身が69式に比べて若干短縮化されて肉厚が増やされているのも特徴です。本体左側面に設けられたマウント・レールに暗視装置を装着し、夜間戦闘で使用する事も可能となっています。使用される弾頭は、対戦車用の成形炸薬弾や対人榴弾、焼夷榴弾など各種製造されました。69-I式ロケット・ランチャーは、後継である使い捨ての89式ロケット・ランチャー（PF-89）により更新され、それまで人民解放軍で運用された他、海外への輸出も行われました。



写真の銃はすべて不可動実物です。

Lefaucheux Paris 20 shot D/A Pinfire Revolver

装弾数20発の非常に珍しいタイプのルフォーシー・リボルバーです。多弾数を実現するためシリンダーは外周と内周の二重構造となっており、それに対応した銃身が上下二連に並んでいます。シリンダーの薬室は外周と内周で配置角度を変えて互い違いに設けられており、射撃をする毎に外周と内周で交互にハンマーがピン・ファイア・カートリッジのピンを撃発する構造となっています。本体右側のローディング・ゲートを開くと、シリンダーの外周と内周に弾薬室を同時に装填する事が可能です。また、排莢用のエJECTOR→ロッドはシリンダーの外周と内周で位置を切り替えるようになっています。本品はルフォーシー・リボルバーの開発者であるユーゲーン・ルフォーシー (Eugène Lefaucheux) がパリのラファイエット通りで経営していた E. LEFAUCHEUX et Cie 社で製造された品で、銃身基部左側面にはブレイク・オープンした銃を圖案化した同社のロゴ及び「LF」の刻印が確認できます。



Lefaucheux Type D/A Pinfire Revolver mfd. by C. R. Kirschbaum

ルフォーシー (Lefaucheux)・リボルバーは、フランスのガスミスであったカジミール・ルフォーシー (Casimir Lefaucheux, 1802-1852) によって発明されたピン・ファイア式（カニ目打ち式）の金属製薬莢を使用するリボルバーです。ルフォーシー・タイプのピン・ファイア式リボルバーは、フランスやベルギーで1850年代から70年代にかけて多種多様なモデルが製造された他、ドイツでも極少数が製造されました。本品は非常に珍しいドイツ製で、刃物の生産地として現在も有名なゾーリンゲン (Solingen) にあった C.R. キルシュバウム (Kirschbaum) 社の製品です。ルフォーシー・タイプのリボルバーは、5連発から20連発までの非常に多くのバリエーションが製造されました。幕末に国内に輸入された C.R. キルシュバウム社製リボルバーの殆どが本品と同じ10連発モデルでした。また、現存する同社製リボルバーの大半が、大型拳銃としては珍しくトリガー・ガードを備えておらず、トリガーが折り畳み式となっています。



Colt Model 1855 Revolving Rifle .52 Caliber Model

コルトM1855 "ニュー・モデル" リボルビング・ライフルのバリエーションとして製造されたモデルで、当初から日本への輸出向けとしてコルト社で特別に製造された品と思われます。銃身は一般的なコルトM1855 リボルビング・ライフルには見られない.52口径のスムース・ボアとなっています。銃身が.52口径となっているのは、同時代に日本国内で運用されていたシャープス小銃と弾薬を共用する為と考えられます。銃身長は約24インチで、フォア・エンドが銃口付近まで伸びたフル・ストック・モデルです。シリnderは1858年以降に生産が本格的に開始された.56口径モデルと同様に装弾数5発の大型タイプとなっています。付属のさく杖(クリーニング・ロッド)は伸縮式のタイプで、ロッド部分はグッタベルカ(天然ゴムの一種)製と思われる黒色樹脂製です。尚、さく杖が伸縮式の為、バット・プレートには分割したさく杖の一方を収納するコンパートメントが元々設けられています。

Colt Model 1855
Revolving Rifle
.52 Caliber Model
コルト M1855
リボルビング・ライフル
(.52口径モデル)



全長 1,080mm
口径 .52in.
装弾数 5発

Sharps Model 1865 Carbine

クリスティアン・シャープス (Christian Sharps) によって設計された南北戦争時の代表的な小銃の一つで、本体下部のレバーを下方に操作することによりブリーチ・ブロックが垂直に下降して薬室が開放され、紙薬莢またはリネン薬莢を装填します。撃発はブリーチ・ブロック上のバーカッション・ニップルに取り付けた雷管をハンマーが打撃する事により行います。また、ベレット・プライマーがハンマーと連動して自動的にセットされるローレンス・ペレット・システムと呼ばれる機構も搭載されていました。M1865は1865年から1866年にかけて製造されたシャープス・カービンの最終モデルで、概ねシリアルNo.がC40000～C50000までの個体が該当しますが、モデル名刻印以外は銃床にパッチ・ボックスのない1863カービンとほぼ同じ仕様となっています。

M1865はスペンサー銃の台頭や製造開始とほぼ同時期に南北戦争が終結した事から、生産数は約5,000挺と極少数に留まり、北軍(合衆国軍)のみが使用しました。



Sharps Model 1865
Carbine
シャープス M1865
カービン



全長 988mm
口径 .52in.
装弾数 単発



本品は明治陸軍により使用された品で、銃身基部上面には「NEW MODEL 1865」のモデル名に加えて菊花紋章が入っています。

NEW MODEL 1865

写真の時は教育委員会発行の「鎌倉刀剣登録証」が付いた可動実物の古式銃です。(無可動実物ではありません)



ハーフ・コック状態でフレーム左側面のボタンを押し込みながらシリnder一軸を後方に引き抜く事により、シリnderの取り外しが可能です。

Remington New Model Army Revolver

E. Remington and Sons社(現在のレミントン・アームズ社)で製造されたシングル・アクションのパーカッション・リボルバーで、南北戦争(1861年-1865年)ではコルトM1851と共に主要拳銃として使用されました。南北戦争時当初はコルト社製リボルバーが北軍に多く供給されていましたが、1864年のコルト社工場火災以後はレミントン社製リボルバーの供給量が最も多くなりました。コルト社製リボルバーでは銃身とフレームがシリンダーを挟んで前後に分解出来る構造となっていましたが、レミントン社製リボルバーはシリンダーを開んでフレームが一体となったソリッド・フレーム構造で、耐久性がコルトに比べ優れていた他、精度も良好で好評を得ました。尚、銃身長8インチの.44口径モデルがアーミー、銃身長7.42インチの.36口径モデルがネーピーと呼ばれました。銃身下部のローディング・レバーを引き下げると、シリンダー軸を前に引き出す事が出来、シリンダーを迅速に取り外す事が可能でした。



Colt Model 1862 Police Revolver

コルトM1862ポリス・リボルバーは、コルト社で1861年から1873年まで僅か28,000挺だけ製造された管打式のシングル・アクション・リボルバーです。フレームはコルトM1849ポケット・リボルバーとほぼ同サイズですが、シリンダー前部の2/3が.36口径に対応するため肉厚となりボア・アップされています。このシリンダーは、肉厚となっている箇所に軽量化の為の溝を設けたハーフ・フルーテッド・シリンダーとなっています。M1862ポリス・リボルバーは全て.36口径の5連発モデルで、銃身長は3 1/2インチ、4 1/2インチ、5 1/2インチ、6 1/2インチが存在し、M1849ポケット・リボルバーとは異なる銃身バリエーションとなっています。本品は当時の米国で護身用として銃身を約6cmまで切り詰めたモデルです。銃身を切り詰めた事に伴い、銃身下部のローディング・レバーは取り外されおり、取り外した後の穴の部分は鉛により塞がれています。この改造も使用されていた当時に行われたものと思われます。



British Coast Guard Pattern 1839 Sea Service Pistol

1839年に英国沿岸警備隊制式となった15 Bore (約.67口径) の単発管打式拳銃です。1822年に組織された沿岸警備隊の装備品は英海軍と基本的に同様でしたが、例外として前装フリントロック式のP1831拳銃が専用装備として採用されました。その後1839年に沿岸警備隊制式となった管打式のP1839拳銃は、銃身長がP1831の4.5インチに対して6インチと僅かに長くなり、銃身形状もオクタゴン・バレルからラウンド・バレルへと変更されました。沿岸警備隊用の拳銃は海軍用拳銃のようなペレル・ブックは装備せず、グリップ下部にスリング・スイベルを備えていました。P1839 沿岸警備隊拳銃の採用と同時に、英海軍でもP1839とよばれる新型拳銃が採用されましたが、この海軍用P1839拳銃は口径が 26 Bore (約.57口径) と小口径であった他、ペレル・ブックを装備していました。P1839拳銃は陸軍用のP1842槍騎兵拳銃に比べて取り回しが良かった事から、輸送部隊等の地上部隊の他、警察や植民地の民兵組織にも支給されました。

British Coast Guard
Pattern 1839
Sea Service Pistol
英國沿岸警備隊 P1839 管打式拳銃



全長 289mm
口径 17mm
装弾数 単発



ロック・プレートには王冠とヴィクトリア女王を示す「V・R」を組み合わせた刻印の他、「TOWER」検査刻印及び製造年刻印が入っています。



Danish M1848 Percussion Cavalry Pistol

1848年にデンマーク陸軍騎兵用として採用された官給品の単発管打式拳銃で、銃身長200mmと大型のモデルです。構造は当時の列強が使用していた騎兵拳銃と同様ですが、デンマーク軍用の最も大きな特徴として、ハンマーのスパー(指掛け部分)がリング状になっており、この部分に親指を掛けてハンマーのコック操作を行います。尚、本モデルにはさく杖は当初から装備されませんでした。M1848騎兵拳銃は、1848年から1852年にかけてドイツ(オーストリアを除くプロイセン王国を中心としたドイツ連邦)とデンマーク王国(スウェーデン王国の義勇兵も含む)の間で争われた第一次シェーレスヴィヒ＝ホルシュタイン戦争でデンマーク騎兵部隊によって最初に使用され、1864年の第二次シェーレスヴィヒ＝ホルシュタイン戦争でも投入された多くの騎兵部隊で使用されました。本品は1854年製である事から、第二次シェーレスヴィヒ＝ホルシュタイン戦争で使用された可能性も考えられます。

Danish M1848
Percussion Cavalry Pistol
デンマーク軍 M1848 騎兵拳銃



全長 378mm
口径 18mm
装弾数 単発



サイド・ロック・プレートにはコペンハーゲン造兵廠を示す王冠刻印及びモデル名刻印「MD-1848」に加えて、製造年「1854」とアッセンブリ番号「41」が打刻されています。

Japanese Matchlock Long Cavalry Pistol KUNITOMO Style

国友鐵治の名工である国友源右衛門充胤の在銘馬上筒です。充胤は江戸時代の天才発明家、国友一貫斎藤兵衛の実弟である八代目国友源右衛門の子で、九代目国友源右衛門です。明治十九年没ですので、本作は幕末に作られた品と考えられます。全長が70cm近くもある大振の馬上筒で、銃身に島津家の注文と思われる「丸に十の字」の家紋の他、「常口」の銀象嵌が入った非常に良く出来た品です。先目当は袖形、元目当は千切透しになっています。銃身は優美な丸型で、上部だけが平らになった表一角となっており、銃口には丸柑子が設けられています。カラクリは地板の表面に鉄が全く出でていないシンプルな内カラクリになっています。真鍮製の雨覆には一体となった煙返しが付いています。銃身は台(銃床)に対して前部一か所の目釘により固定されます。台についても高級な裡を用いるなど贅沢な作りとなっており、内部には「吉田三郎右エ門直道」と台師の銘が入っています。

Japanese Matchlock
Long Cavalry Pistol
KUNITOMO Style
火縄銃 国友馬上筒
(在銘: 江州國友源右衛門充胤)



全長 700mm
口径 16mm
装弾数 単発



Japanese Large-caliber Matchlock Gun

本品は口径が19mm、全長が約110cmの中筒サイズの火縄銃で、抱きかかえるようにして射撃をしたと思われます。軍用の中筒は6勾筒(15.8mm)~10勾筒(18.7mm)前後で、それ以上は大筒と呼ばれる事もあります。本品の筒(銃身)は後方に向かって緩やかに広がった形状の八角銃身で、銃口部には八角柑子が設けられています。目当は杉形の先目当及び元目当に加えて、遠距離射撃用の中目当が設けられています。尚、元目当と中目当はいずれも千切透しとなっています。銃身は台(銃床)に対して3か所の目釘により固定される構造となっています。本品の銃身下部には「地鉄巻張 摶州住井上関右衛門作」と摶州鉄砲鍛冶の一門である井上関右衛門の銘が切られています。また、銃身が収まる銃床の内側には「岡田十兵衛作」と台師の銘が確認出来ます。その他、銃身上面には銀象嵌により「丸に右三階松紋」が入っています。カラクリは内カラクリで、引金後方にはナマコ金(力金)が設けられています。

Japanese Large-caliber Matchlock Gun
火縄銃 中筒
(在銘: 地鉄巻張 摶州住 井上関右衛門作)



全長 1,105mm
口径 19mm
装弾数 単発



写真的場合は教育委員会発行の「鉄砲刀剣登録証」が付いた可動する実物の古式銃です。(無可動実銃ではありません)

Japanese Matchlock Musket SATSUMA Style



薩摩（現在の鹿児島県）で製作された口径が六匁（約16mm）の火縄銃です。薩摩筒は日本に伝来したボルトガル系火縄銃の面影を多く残しており、銃床部には船上で射撃する事を想定した小指を掛けける為の切り欠きが残されています。銃口部に種子島柑子とも呼ばれる小さなラッパ状の柑子が設けられ、カラクリの地板金が十文字型のネジにより一か所で固定されている点も特徴です。前後の目当は一般的な火縄銃に比べて小型でシンプルな形状となっています。火皿は銃身に捻じ込まれた品が多く見られ、このタイプでは兩覆を火皿で挟み込んで固定しています。口薬を乗せる火皿の穴（薬池）は大きく深い形状となっています。カラクリは蟹目ナキ内カラクリで、現代銃のような舌形の引金は一部個体では前方に倒す事が出来、倒した引金は板バネにより元の位置に戻ります。アコウ材が使用される事が多い銃床には左右の継ぎ目が無く、銃身の固定には銅製の胴締が多く使用されました。

Japanese Matchlock Musket
SATSUMA Style
火縄銃 薩摩筒
(在銘:薩州住通房作、六匁筒)



全長 1,146mm
口径 16mm
装弾数 単発



鉄製のカラクリ地板金の外縁部には真鍮による線飾りが施されています。

Japanese Matchlock Musket SAKAI Style



本品は在銘で、銃身下部に「井上闇右衛門ニテ直シ」の銘が入っています。井上闇右衛門は撰州堺の代表的な鐵砲鍛冶の一門です。本品の銃身は後方に向かってやや広がった形状の八角銃身で、銃口部には八角柑子が設けられています。先目当は杉形、元目当は筋割となっており、先目当後端には黄銅色の別金屬が埋め込まれています。銃身は銃床に対して4か所に目釘により固定される構造で、銃床の目釘穴やカラクリの銅裏金には梅の花弁を象った飾り金具が取り付けられている他、火縄通しや火縄消しに菊を象った飾り金具が付いています。他にも胴金後方の銃床上面には唐草模様の入った飾り板が取り付けられていますが、堺筒としては装飾が全体に控えめとなっています。カラクリは外カラクリで、涙滴型の引金には用心金が設けられています。火蓋下面には漢数字の「二」が彫られている他、銃床内側にも同じ「二」の数字が墨書きされています。

Japanese Matchlock Musket, SAKAI Style
火縄銃 堀筒 (在銘:井上闇右衛門ニテ直シ)



全長 1,230mm
口径 13mm
装弾数 単発



写真的前は教育委員会発行の「鉄砲刀剣類登録証」が付いた可動する実物の古式銃です。(体験実戦ではありません)

Japanese Matchlock Musket

口径が12mmの細筒(小筒)と呼ばれる狩猟用、または標的射撃用の火縄銃です。全長は約134cmで火縄銃の細筒としては一般的なサイズとなっています。銃身は後方に向かってやや広がった形状の八角銃身で、銃口は八角相子です。先目当は杉形で後端の狙点部分に銀白色の金属が使用されており、元目当は筋割となっています。銃身には相子後方の筋立を除いて装飾は殆ど施されていない質実剛健な作りとなっています。カラクリは外カラクリで、カラクリの地板金や雨覆、火蓋、引金、用心金といった主要な部品は真鍮製です。用心金前方の銃床下部に丸い抱き柏の家紋が入った真鍮製の飾り板が取り付けられている他、目釘穴など各部に柄の葉を象った飾り金具が取り付けられています。これらの飾り金具は立体的に彫り込まれた入念な作りとなっています。また、用心金取り付け基部及び崩金後方の紙穴には梅の花弁を象った飾り金具が取り付けられています。



Japanese Matchlock Musket
火縄銃 細筒(無銘、
壬申五四五番山梨縣)



全長 1,344mm
口径 12mm
装弾数 単発

銃身上面には「壬申五四五番山梨縣」と
篆で彫られています。

Japanese Matchlock Musket KISHU Style w/ Inlay

本品は全長約124cm、口径13mmの一般的なサイズの細筒で、銃身下部には「藤巻張芝辻甚三郎清正」の銘が入っています。辻甚三郎は撰州堺の鉄砲鍛冶ですが、本品は全体に紀州筒の特徴が見られます。これは当時紀州の鉄砲鍛冶が不足していた事から、堺の鉄砲鍛冶等に銃身を下請け発注していたためと考えられます。本品の銃身は相子のない八角銃身で、先端と後端がやや広がった形状となっています。先目当はたんけん形、元目当は筋割となっています。銃身は3か所の目釘金具により銃床に取り付けられ、さらに銃床前部で真鍮製の胴金により固定されます。銃身上面には銀象嵌により丸い揚羽蝶の家紋が施されています。銃床の庵は浅く、カラクリは蟹目ナキ内カラクリです。火挿や地板金、胴金は鉄製ですが、雨覆や火蓋は真鍮製となっており、煙返しが付いています。引金は精緻なローレットが施された涙滴型で、特徴的な角型の用心金が取り付けられています。



Japanese Matchlock Musket
KISHU Style w/ Inlay
火縄銃 紹筒
(在銘:藤巻張芝辻甚三郎清正、家紋銀象嵌)



全長 1,240mm
口径 13mm
装弾数 単発

写真的前は教育委員会発行の「鉄砲刀剣類登録証」が付いた可動する実物の古式刀です。(無可動実物ではありません)

Colt Model 1874 Gatling Gun on Field Carriage, 1/2 Scale

ガトリングガンは、1861年に米国のリチャード・ジョーダン・ガトリング (Richard Jordan Gatling) により開発された初期の機関銃です。回転する複数の銃身を備えており、人力により給弾・装填・発射・排莢のサイクルを繰り返す事で高速での連射が可能でした。1874年に登場したM1874は.45-70弾を使用するモデルで、10本の銃身を備えながらもロック・シリnderやキャリア・ブロックといった部品を中空の鋳造製とし、更にロック部分を大幅に短縮化する事で小型・軽量化が図られました。給弾機構はブロードウェルドラム・フィード (Broadwell Drum Feed) と呼ばれるもので、ドラム型の弾倉内に弾薬を15段積み重ねたものを16列分収納し、一列射撃が終わるごとに弾倉を手動で回転させて次の列の射撃を行いました。M1874には18インチの短銃身モデルの他、砲架に搭載して運用する32インチの長銃身モデルが製造されました。本品は米国ユタ州OremのDouglas & Corinne Furrによって手作りで製作された約1/2サイズのスケール・モデルです。



Colt Model 1874 Gatling Gun
on Field Carriage, 1/2 Scale
コルト M1874 ガトリングガン
(無可動 1/2 スケール)



全長 1,100mm
口径 6mm
装弾数 240発



本体後部上面にはガトリングの
バテンクト刻印とコルトのアドレ
ス刻印が入った銘板が再現さ
れています。

GAZETTE SHIORI



2019年4月1日より、弊社にて無可動実銃や登録証付古式銃を1挺お買い上げいただく毎に「ガゼットしおり」を1枚お渡しするキャンペーンが始まりました。(通販のお客様には商品と同梱してお送りいたします)。弊社発行のガゼットに挟んでおしゃりとしてお使いいただくのに最適なサイズで、全13種類ございます。このガゼットしおりを合計10枚集めていただくと、弊社商品が20%OFFになる割引券としてお使いいただけます。詳しくは弊社HPメニューの「Bookmark(ガゼットしおり)」をご参照ください。なお、ガゼットしおりを5枚集めると弊社商品が10%OFFになる期間限定キャンペーンも不定期で実施予定です。(実施決定時は弊社ブログにて告知させていただきます)。

ガゼットしおり割引ご利用時の注意事項

- ・ガゼットしおりの譲渡・転売は無効となります。
※お渡しする際に、しおりの種類・枚数・お客様名を控えさせていただいております。
- ・割引サービスは、弊社に氏名・住所をご登録いただいているお客様のみ対象とさせていただきます。なお、割引サービスご利用時点で有効なご住所をご登録いただけてない場合は、割引サービスの適用対象外となります。転居等により、弊社に登録されているご住所から現住所が変更となっているお客様につきましては、その旨をお申し出ください。
- ・割引サービスのご利用は、弊社がしおりを発行したご本人様のお会計1回のみに限らせていただきます。
- ・割引適用商品はしおりを発行する発行外となります。
- ・銃のご購入時に割引サービスをご利用される場合は、1挺にのみ適用されます。また、銃と同時にご購入されるアクセサリーにも割引が適用されます。アクセサリーは同一会計内であれば個数の制限なく割引が適用されます。
- ・一部割引適用外の商品もございます。
- ・他の割引サービスとの併用はできません。
- ・複製もしくは変更、著しく汚損されたしおりはご利用いただけません。
- ・しおりの配布は、弊社にてしおりの在庫がなくなった時点で終了となります。
- ・有効期限はございません。
- ・クレジットカード及びPayPalでのお支払いの場合には、割引サービスは適用されません。
- ・しおりのご利用条件は予告なく変更となる場合がございます。

HP上で「ガゼットしおり」
に関するページは下記か
らもご覧いただけます。



写真的前はすべて無可動実銃です。

まずはお電話ください。03-5818-1123

弊社よりお買い上げ頂いた品は状態が販売時と同じであれば販売価格の最低30%を保証します。

宅配便での送品、お持ち込みどちらでもOKです。

梱包材料の無い方には専用段ボール箱をお送り致します。

査定をさせて頂きます。

今まで弊社で査定した品のほぼ100%の商談が成立しています。それだけ弊社の査定にはご満足頂いております。※査定額の有効期限は1ヶ月です。

買取・下取前提の査定は
無料です。お気軽にお電話ください。

即日、貴方の銀行口座にお振込致します。

**大量にある場合は
全国どこでも
出張買取り致します。**

◆買取り/下取りのご案内◆

買取り・下取りの際は身分証明書のコピーを頂きます。ご来店の際は、必ず身分証明書(運転免許証、健康保険証、パスポート等)をご持参ください。宅配・郵送にて商品をお送りいただく場合は、身分証明書のコピーと買取り代金のお振込口座情報(名義人、銀行名、支店名、口座名、口座番号)を明記のうえ同封してください。

●買取りについて

- 弊社よりお買い上げいただいた無可動実銃は状態が販売時と同様であれば無条件で販売価格の最低30%を保証し、最高200%以上で買取り致します。買取り価格は、種類や市場相場によって変わりますが、最近は平均50%程度です。お電話、メールでの大まかな査定も出来ます。お気軽にお問い合わせください。
- 他店から購入された品であっても、正規輸入品であれば買取り可能です。他店からの購入品は現物を確認した後に正式な査定となります。お電話での査定額は、それを約束もしくは保証するものではありませんので了承ください。その際は購入店名(輸入業者名)をお知らせいただき、必ず身分証明書(運転免許証、健康保険証、パスポート等)をご持参ください。宅配・郵送で弊社へ直接送られる方は身分証明書のコピーを同封してください。
- アクセサリー、軍装品、書籍のみの場合は買取りが出来ない場合もございますので、事前にお問い合わせください。
- 正式査定には品を宅配便でお送りいただくか、東京、大阪店へ直接お持ち込みください。梱包材料がお手元に無い方には専用段ボール箱を無料でお送り致します。尚、査定品を弊社までお送りいただく際の送料はご負担していただきます。
- 買取りが成立した後(代金の振込み後)のキャンセルは出来ません。あしからず了承ください。

●下取りについて

- 下取りの条件は基本的に買取りと全く同様ですが、査定を買取り価格よりも5%高く評価させていただきます。ご購入予定の品によっては10%から30%買取り価格よりも高く評価出来る事もありますので、ご相談ください。
- 下取り品の代わりに購入される品が下取り品の価格より低い場合の査定は、買取り価格と同等になります。
- 下取り品の代わりに購入される品の返品は、弊社規定の返品期間内であれば他の品との交換は可能です。但し、返品してキャンセルになった場合の査定額は買取り価格と同等になります。

ご来店のお客様へ

*弊社は世界で最も多種の小火器を展示販売している無可動実銃の専門店です。一般的な品は数多くの中からお選びいただけるように、一種類につき数挺ずつ在庫を用意していますので、ぜひご来店いただき、ご自身の目で品をお確かめください。希少価値の高い品につきましては一品物もございますので、遠方よりご来店の際は予めお電話で在庫状況をご確認ください。

*東京上野本店、大阪店ともに年中無休です。(お正月休みを除く)

営業時間は 東京店 12:00~19:30、大阪店 12:00~20:00です。

*各種クレジットカード(VISA、Mastercard、JCBとその提携カード(Amex、Dinersなど)、Nicos、Orico)を取り扱っています。(分割2回、ボーナス払いはご利用いただけません。)

*オリエントコーポレーションの店頭即決ローン(Oricoローン)も取り扱っております。ローンをご希望の方は口座番号、銀行印と身分証明書(運転免許証、健康保険証等)をお持ちください。

*重機関銃をお買い求めのお客様で簡易包装でのお持ち帰りをご希望される方には、販売価格より1万円サービスさせていただきます。(プローニング M1919 A4機関銃など、対象外の品もありますので、お会計の前にご確認ください。)

通信販売をご利用のお客様へ

①お電話(TEL.03-5818-1123)、またはメール(chicago@regimentals.jp)にてご注文を承っております。

②弊社HPからのご注文も承っております。まずはご希望の商品ページにある「ご注文受付はこちら」から「ご注文フォーム」をご送信ください。

シカゴレジメンタルス <http://www.regimentals.jp>

③ご注文受付後、在庫を確認した上で折り返し弊社よりご連絡致します。なお無可動実銃の送料は弊社でサービスさせていただきます。

④お支払い方法は下記の通りです。ご送金またはご入金いただいた場合は、確認のために必ずお電話またはメールにて東京上野本店まで早急にお知らせください。

(送品業務を円滑にするとともに事故を防ぐためにも宜しくお願い致します。)

◆銀行送金の場合

三井住友銀行 江坂支店 普通口座296764 名義人 株式会社シカゴレジメンタルス ゆうちょ銀行 記号10130 番号87425981 名義人 株式会社シカゴレジメンタルス

◆現金書留の場合

〒110-0005 東京都台東区上野1-12-7 (The シカゴビル)
株式会社シカゴレジメンタルス TEL.03-5818-1123

◆クロネコヤマト コレクトサービス(代金引き換え)の場合

14:00までにご注文を頂ければ一部地域を除き翌日配達が可能です。

*返品の場合は送料の他に代引手数料もご負担いただきますのでご了承ください。

(注)銀行へお振込みいただいても15:00を過ぎると翌日入金となることもありますので、その場合は翌日発送となります。

★通信販売の送料・代引手数料について

*ご購入金額が3万円(税込)以上の場合は、送料・手数料ともにサービスさせていただきます。

*ご購入金額が3万円(税込)未満の場合は、500円の送料をご負担いただいております。
また、コレクトサービス(代金引き換え)の場合は、送料500円+代引手数料500円=合計1000円をご負担ください。

◆クレジットカードでお支払いの場合

通信販売でも店頭とほぼ同じ各種クレジットカードをご利用いただけますが、一部ご利用いただけないカードがございますので、お問い合わせください。

◆Oricoローンをご利用の場合

通信販売でもOricoローンをご利用いただけます。簡単な手続きで分割払いが可能です。また金利もクレジットカードより低くお得です。(分割回数は、webオリコが3回~60回、専用用紙記入によるお申し込みが6回~60回となります。)

◆PayPalでお支払いの場合

在庫確認後にお送りするPayPal決済用メールの内容をご確認の上、PayPal決済手続きをお願いします。

⑤ご注文いただいた品が店頭在庫としてある場合は、ご送金・ご入金確認後、または決済完了後に宅配便にて発送致します。

*弊社取り扱いの商品は書籍とスコープを除き全て返品が可能ですので、通信販売でも安心してお買い求めいただけます。もし商品にご満足いただけない場合は、商品を受け取られてから7日以内にご連絡の上、ご返送ください。お送りいただいた金額より送料、各種手数料(代引き手数料・振込手数料など)を差し引いた金額を返金致します。(但し、古い品ですので返品は常識的な回数でお願い致します。)

●ご不明な点がありましたら東京上野本店までお気軽にお問い合わせください。

古式銃の買取り、下取りについての流れ

◇まずはご確認ください◇

1. 各都道府県の教育委員会が発行した「銃砲刀剣類登録証」が付いた合法的に所持ができる古式銃のみを買取り致します。

「銃砲刀剣類登録証」がない古式銃(例えどのように古いタイプの銃であっても)の買取りはできません。

*「銃砲刀剣類登録証」を紛失された方は「再交付」、新しく発見された古式銃については「発見届」から「登録審査」までのアドバイスを致します。※「再交付」もしくは「登録」の保証をするものではありません。

*「銃砲刀剣類登録証」が交付されてから弊社で買取りを行います。

*明治以降の品(真正拳銃に該当する物)につきましては、古くても古式銃とは見なされませんので、上記説明に沿うことはできません。

銃砲刀剣類の登録証サンプル



昭和34年交付

昭和48年交付

平成2年交付

◇ご注意ください◇

2. 稀に「銃砲刀剣類登録証」が付いていても、古式銃現物と「登録証」が一致しない場合もあります。この場合は教育委員会での「再審査」が必要となります。古式銃現物と登録証が一致しているかご確認ください。

◇お問い合わせください◇

3. 買取り可能な登録証付き古式銃であれば、お電話またはメールで、銃名(モデル名)、登録証情報、購入金額、購入時期、商品のコンディション(作動するか否か、欠品がないか)、付属品の有無、買取り希望金額をお伝えいただければ、大まかな査定が出来ます。

また、火縛銃の場合はモデル名などがないので、写真など査定判断が出来るものをお送りください。

まずはお気軽にお問い合わせください。

◇査定いたします◇

4. 古式銃の現物と登録証を確認した後に正式な査定となります。お電話での査定額は、それを約束または保証するものではありませんので、ご了承ください。

正式査定には品を宅配便等でお送りいただくか、東京、大阪店へ直接お持ち込みください。

ここから先は前ページの「無可動実銃の買取り/下取りのご案内」をご参照ください。

※古式銃の付属品のみの買取りは基本的に出来ませんが、品によっては可能な場合もありますのでお問い合わせください。ただし、銃と一緒に付属品(特にオリジナル木箱など)を買取りに出される場合はプラス評価をさせていただきます。

*古式銃現物と登録証は必ず一緒にお送りください。

●ご不明な点がありましたら東京上野本店までお気軽にお問い合わせください。

無可動実銃について

無可動実銃とは実物の銃に対して発射機能を排除する加工を海外で施し、装飾用として合法的に輸入された品です。

輸入された時期によって多少の違いはありますが、下記の加工は最低限施されているのが無可動実銃の条件です。

* 銃身内部に鉄製のインサートが銃口から薬室まで挿入されて塞がっており溶接によって抜けなくなっていること。

* 薬室と銃身にスリットが入っていること。

* 薬室は溶接によって塞がっており装填は出来ないこと。

* ボルトの一部若しくは半分を除去して使用不可能にし、機関部本体に溶接で固定されること。

* 引き金を除く、トリガー・メカニズムの一部、若しくは全てを取り外していること。

平成10年以降に輸入された品はより厳しい加工が施されております。

古式銃砲について

下記の銃砲刀剣類所持等取締法第十四～十八条(抜粋)に基づき、教育委員会によって「銃砲刀剣類登録証」が交付された古式銃は合法的に所持が認められています。

第十四条 都道府県の教育委員会は、美術品若しくは骨とう品として価値のある火縛式銃砲等の古式銃砲又は美術品として価値のある刀剣類の登録をするものとする。

2 銃砲又は刀剣類の所有者(所有者が明らかでない場合にあつては、現に所持する者。以下同じ。)で前項の登録を受けようとするものは、文部科学省令で定める手続により、その住所の所在する都道府県の教育委員会に登録の申請をしなければならない。

3 第一項の登録は、登録審査委員の鑑定に基いてしなければならない。

4 都道府県の教育委員会は、第一項の規定による登録をした場合においては、速やかにその旨を登録を受けた銃砲又は刀剣類の所有者の住所地を管轄する都道府県公安委員会に通知しなければならない。

5 第一項の登録の方法、第三項の登録審査委員の任命及び職務、同項の鑑定の基準及び手続その他登録に関し必要な細目は、文部科学省令で定める。

(登録証)

第十五条 都道府県の教育委員会は、前条第一項の登録をする場合においては、登録証を交付しなければならない。

2 登録を受けた銃砲又は刀剣類を所持する者は、登録証を亡失し、若しくは盗み取られ、又は登録証が滅失した場合においては、文部科学省令で定める手続により、速やかにその旨を当該登録の事務を行つた都道府県の教育委員会に届け出てその再交付を受けなければならない。

3 登録証の様式及び再交付の手続は、文部科学省令で定める。

(登録を受けた銃砲又は刀剣類の譲受け、相続、貸付け又は保管の委託の届出等)

第十七条 登録を受けた銃砲又は刀剣類を譲り受け、若しくは相続により取得し、又はこれら の貸付け若しくは保管の委託をした者は、文部科学省令で定める手続により、二十日以内にその旨を当該登録の事務を行つた都道府県の教育委員会に届け出なければならない。貸付け又は保管の委託をした当該銃砲又は刀剣類の返還を受けた場合においても、また同様とする。

2 登録を受けた銃砲又は刀剣類を試験、研究、研磨若しくは修理のため、又は公衆の観覧に供するため貸し付け、又は保管の委託をした場合においては、前項の規定にかかるわらず、届出を要しない。

3 都道府県の教育委員会は、第一項の届出を受理した場合においては、速やかにその旨を当該届出に係る銃砲又は刀剣類の所有者の住所地を管轄する都道府県公安委員会に通知しなければならない。

第十八条 登録を受けた銃砲又は刀剣類を譲り渡し、貸し付け、若しくはこれら の保管を委託し、又はこれらを他人をして運送させる者は、当該銃砲又は刀剣類の登録証とともにしなければならない。

2 登録を受けた銃砲又は刀剣類を譲り受け、借り受け、又はこれらの保管の委託を受ける者は、当該銃砲又は刀剣類の登録証とともにしなければならない。

3 何人も、当該銃砲又は刀剣類とともにする場合を除いては、登録証を譲り渡し、又は譲り受けではならない。